

CROSS OF WORLD

しきん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は、因果導体から解放された。

そして、少年は元の世界に戻る——筈だった。

だが、少年はまだ知らない。

己のまだ知らぬ世界を巡る永い戦いが、始まろうとしていた事を。

己が数々の異世界の戦士達と出逢う事を。

己を誘う新たな戦いが、何を齎すのかを。

これは、一つの世界で巡り合う、戦士達の御伽噺である。

登場作品

アズールレーン

アリス・ギア・アイギス（キャラクターのみ）

美味しんぼ（キャラクターのみ）

艦隊これくしょん

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア

機動戦士ガンダムSEED DESTINY

コマンドー（キャラクターのみ）

ジパング

トータル・イクリップス（キャラクターのみ）

ファイナル・カウントダウン

フレームアームズ（機体のみ）

フレームアームズ・ガール

崩壊3rd

マブラヴアンリミテッド ザ・デリアフター（キャラクターのみ）

マブラヴオルタネイティヴ

マブラヴストライクフロンティア（キャラクターのみ）

e t c . .

《WARNING!!》

1. 本作は艦これ世界をベースとした（艦これ勢が主人公とは言っていない）多重クロス作品です。

2. 作者はガンダムシリーズ及びアズールレーン以外碌にプレイしたことが無く、ガバガバ知識が目立つ事もあります。

3. オリジナル設定が混じっている場合があります。

4. BETAなんて出ません！コイツ等までぶち込んだら作者が死んでしまいます
!!マブラヴファンの方々には大変申し訳ございませんが、BETAは出しませ
んッ!!!（公約）

不定期更新になるのでご了承下さい。

目次

第0話	目覚める少年	1
第1話	漂流、そして目覚め	25
第2話	自由と驚	39
第3話	初陣を終えて	54
第4話	誘われし者達・前編	61
第5話	誘われし者達・後編	76
第6話	盾とアクトレスと桜と	89
第7話	出向初日の緊急警報（エマー ジェンシー）	99

第0話 目覚める少年

20XX年 10月22日 午前7時23分 武の自宅

「……………」

……………」

「……………」

……目が覚める。意識が戻っていく。

なにか、悲しい——いや・：『悲しい』なんていう言葉だけではとても言い表せないような、途轍もなく大きな喪失感を感じながら、俺はゆっくりと目を開ける。

そして——

「……………」

何故だろうか……やけに天井が低く感じた………つて、んん??

「はい?——つて」

思わず起き上がり、ベッドの下を見る。

どういふ訳か、俺の部屋のベッドが二段ベッドになっていた。

「へアツ!?だ、誰だア!」

それだけじゃない。

下の段で見知らぬ男の子が寝ていた。俺より若干濃い茶髪で、見た感じは俺より一つ——いや、二つ年下か……？

「……ん……兄ちゃん……休みなんだから、もうちよつと寝させてくれよ……」
寝惚けた様子で男の子がそう言った。そうか、眠っていたところを、俺が大声を上げちゃったんだな。なんていうか、ごめんな——つて、そうじゃなくて！

慌ててベッドから降りようとした、その瞬間……

「——ッ!？」

強烈な頭痛が俺を襲った。尤も、ほんの一瞬の出来事だが。

この一瞬のうちに、色々な記憶のようなものが脳内にフラッシュバックした。

それに、訳の分からない状況に直面したのはこれが初めてじゃない……少なくとも、経験はある……筈だ。

並んで配置された二つの机を見る。上に置かれている物から、一目で右の机が俺の机だと分かった。違う点があるとすれば、置いた記憶の無い写真立てが置かれている事ぐらいか……ん？

その写真立てを見た時、違和感を感じた。写真には、俺と父さんと母さん、そして俺の知らない男女が写っている。1人は今、下の段のベッドで寝ている男の子、もう1人

はピンクっぽい茶髪の女の子。ついでに言うなら・・・2人共、俺より背が低い。

「どういう事だ、これ・・・!?!」

まるで家族写真じゃ——待てよ？ベッドで寝ているこの子：『兄ちゃん』って言うてたよな？だとすれば・・・いや、俺には弟も妹もいなかった筈！

混乱して、周りを見る。

その時、壁に付いているフックに掛けられているカレンダーを見つけた。

カレンダーの上の部分には・・・

『2023 OCTOBER』

一瞬、血の気が引いたような気がした。恐らく、これは気の所為でも見間違えた訳でもない。

何故なら、カレンダーの一番表になっているページの上の部分にそう記されていたのだから。

まさか——

そう思つて、カーテンを開けると・・・。

「あれ？」

若干の違和感こそあるが、元の世界(?)の町の光景が広がっていた。

帰ってきた・・・のか？でも・・・だとしても何かがおかしい。写真の子、カレンダー・・・

間違いなく、何かが――

そう思っていた時だった。

「では、ちよつと入りまゝす――」

背後から、ドアが開く小さな音と共に女の子の小さな声が聞こえた。

振り向くと、そこにいたのはさっきの写真に写っていたあの女の子だった。

当然、俺と女の子の目が合つて――

「――つて、ええ!?!」

見事に驚いた。

「た、武お兄ちゃん!?!もう起きてたの!?!」

そりやそうだよな。お兄ちゃんがまだ寝ていると思つたら、もう起きてるんだ

も・・・

・・・今この娘、何て言つた?俺の事を『武お兄ちゃん』つて呼んだ?俺が、お兄ちゃん!?!

目覚めてから感じていた違和感が、確信へと変わった。どうやら、この世界(?)の俺には弟と妹がいるようだ。

「ぐへえ」

背後から聞き覚えのない声が聞こえてきた。

ま、まさか……。

恐る恐る振り向いてみると……前の男と同様、衛士強化装備とは違うパイロットスーツを着ている金髪の男が眠っていた……ハアツ!?

「おまつ……な、なんだなんだ!?!」

なんで……純夏でも冥夜でもなくて、見知らぬおつさん2人と一緒に川の字になって寝てたんだ——って、冥夜?……純夏!!

あまりの事態に混乱していた。訳の分からない状況に直面したのはこれが初めてじゃない……少なくとも、経験はある……筈だ。

『次に、深海棲艦のニュースです。国連軍は東南アジアへの追加派兵を検討しているようです』

すると、さつき動いた時にリモコンの電源ボタンを押したのだろうか、少し小さい薄型テレビからニュースキャスターの声が聞こえるのを感じた。何やら……『シンカイセイイカン』がどうのこうのと言っているが……シンカイセイイカンって、何だ?

机には写真立てが置かれている。だが、違和感があった。その写真には、純夏がいない代わりに、俺の記憶に無い人が、少なくとも2人写っている点だ。

いや、今はそれよりも……。

兎にも角にも、現状を確かめなければ何も分からない。

そう思つて、カーテンを開けると……。

「あれ？」

若干の違和感こそあるが、元の世界(?)の町の光景が広がっていた。

「帰つてきた……のか?でも、何だ?何なんだ、この違和感は……?」

元の世界の景色であつて、元の世界の景色じゃない……そんな気がする。

何を言っているんだ?と思うかもしれないが、本当にそういう違和感があるのだ。

「……誰だ……私を足蹴にする奴は……」

「うるさい、なあ……スクランブルじゃないなら……もう少し、寝かせてくれよ……」

と……ここで自分以外の声が聞こえ、現実には引き戻される。

ハハハ……駄目だな。焦ると視野が狭くなつちまうのは、あの戦いを経験しても全

く変わらないみたいだ。

元の世界に戻りたい……その願いは叶わなかった(何故かそんな気がする)けど……

俺は今、こうしてここにいます。

そうだ。まずは……この状況をどうにかしないと、な。

「……む……ここはどこだ……?」

金髪の男が目を覚ました——今だ!

「あの……いきなりですみません。貴方達は誰ですか？」

瞬間、俺は金髪の男に声を掛けた。

「む……？」

「どうやら、この人もこの状況に戸惑っているみたいだ。訝しげな表情がその証拠だ。何はともあれ、まずは分かりそうな事から解決していくのが得策だろう。」

「……何故、アムロがここに!？」

すると、金髪の男が赤毛の男に気付いた。恐らく、『アムロ』というのが赤毛の男の名前なのだろう。だとすれば、この2人は互いの事を知っているのかもしれない。

金髪の男はすぐに冷静を取り戻したのか、俺の方に視線を戻した。

「……すまない、少年。少々取り乱してしまった。私は——」

金髪の男は一瞬だけ間を開け、続けた。

「——クワトロ・バジーナという」

名前を言う時に間があった事に俺は疑問を抱いた。記憶の混乱があるのかと思つたが、こういう場合は偽名を名乗ったりするパターンもよくある話だ。そして、金髪の男——クワトロ（仮）という男はどう見ても外国人……それが、俺の金髪の男に対する不信感をより一層大きくさせるのだった。

……警戒しておくに越した事はないな。これは迂闊に大事な事を言える状況じゃな

さそうだ。

「ところで少年、私からも質問したいのだが……重力があるという事は、ここは地球なのだろうか……どの辺りだろうか？」

重力がある……ここはどの辺りか……なるほど。

「えーと……日本の横浜ですが」

「日本……？ああ、ジャパンの事か。しかし、あの状況で大気圏に突入して、よく無事でいられたものだ……我々を介抱してくれたのは君か？礼を言う」

「いえ、そんな……」

「おかしい。ここはあの世界じゃない筈だ。なのにクワトロ（仮）はまるで桜花作戦（多分）の当事者のような口ぶりで話している。

……ここは……揺さぶりをかけてみるか!？」

「あの……貴方は、軌道降下兵団所属でいられるのですか？」

「いや、違うが……」

「アクシズはどうなったのかはわかるかな？」

……へ？

「え？あくしず？」

「む……？」

ん？どうなってんだ？アクシズって何だ??

話が噛み合っていないような気がするが・・・俺の気のせい、なのか??

「・・・少年、つかぬ事を聞くが・・・今は何年の何時だ？」

「ええと——」

そういえば・・・テレビの後ろの壁に付いているフックにカレンダーが掛けられていたな。

そう思っただけでみると・・・

『2023 OCTOBER』

一瞬、血の気が引いたような気がした。恐らく、これは気のせいでも見間違えた訳でもない。

何故なら、カレンダーの一番表になっているページの上の部分にそう記されていたのだから。

「2023年の・・・10月22日です。・・・多分」

何故に年の部分だけあんなに違っているのかは分からない。だが、声は変わってはいないし、身体にも変化は無い。少なくとも、身体は夕呼先生と霞と別れた時と同じ状態だ。

少し脱線しちゃった。年の部分以外は俺の基点となるその日の筈だから、間違っただけ

いないと思う。だが、依然として話は噛み合わないままだ。

でも……この部屋にいたって事は……もしかして、この人達も——

「2023年……ッ!?まさか、旧曆にタイムスリップしたとでも言うのか!?アムロ……ええい、いい加減に起きんか!アムロ!!」

突然、クワトロ（仮）が赤毛の男——アムロという男を殴り飛ばした。

「ぐう……殴って起こす事はないだろうが、シャア——シャア?何故、貴様が!……いや、この感じ……まさか、地球か?」

アムロは目を覚ますや否や、クワトロ（仮）に殴り掛かろうとした……だが、何かに気付いたのか、慌てて窓に駆け寄った。

「アクシズは地球に落ちなかったのか……だとすれば、何故……俺達だけ地球に?」
「フツ……だが、アムロ……問題はそこではない。この少年の話によると、我々は今、ジャパンにいるらしい」

「……何だって?」

「問題はそれだけではない。曰く、今は旧曆の2023年だそうだ」

「何を言っている!?!」

……2人の話を聞いて分かった。この2人はこの世界の人間じゃない。少なくとも、この時代の人間じゃないのは確かだろう。

聞く立場になって分かった事がもう一つある。前の世界に例えるなら、この2人は俺、そして2人の話を聞いていた俺は夕呼先生や皆と同じ立ち位置つてところだろうか。だが、今なら分かる。夕呼先生達が俺が喋っていた言葉（例えば『マジ』とか）を理解出来なかつたように、俺が2人の話についていけないんだ。そりゃ、『白銀語』と言われるのも納得だ。今更ではあるが、少し恥ずかしくなつてしまった。

「さて、少年・・・話を戻すが、君は我々がここに居る理由を知っている様子だが、出来れば我々に説明してはもらえないだろうか？」

恥ずかしい過去を思い出していると、クワトロ（仮）が問いかけてきた。

「理由は分かりません。ただ、貴方達の置かれている状況は、何と無くですが分かると思います。その前に、貴方達の事を聞きたいのですが・・・」

「ああ、いいだろう」

「・・・何が何だか分からないが、どうやら君に話を聞くしかなさそうだ。俺も構わないから、何でも聞いてくれ」

俺の問いかけに2人は了承してくれた。

「ありがとうございます。おかしな質問と思うかもしれませんが、必要な事なので助かります。まず・・・貴方達のいた時代は何時ですか？」

「U・C・0093だ」
宇宙世紀

「宇宙世紀? さっき、旧暦って言ってましたけど、西暦で言う何年なんですか?」

「確か・・・2138年になるか?」

「今で言う115年後ですか・・・地球にいる事に違和感を感じていたようですけど、もしかして、他の惑星とかで暮らしてたりするんですか?」

「いや、地球に住む人間は無論いる。だが、テラフォーミング技術の類は未だに確立してはいない。その代わり、スペースコロニーをラグランジュポイントに建設し、そこで生活する者も多にいる。基本的に、コロニーに住む者を『スペースノイド』と呼び、地球に住む者を『アースノイド』と呼ぶ」

「俺は・・・アースノイドなのだろうな」

何というか・・・さっきの話を聞いて予想していたとはいえ、SFチックな話が飛び出してきたな。しかもスペースコロニーって・・・本当に凄いな。

だが、疑問に思ったことがある。アムロさんが自分の事をアースノイドと言った時の雰囲気からすると、スペースノイドとアースノイドの間には差別が存在するのだろうか。宇宙に住むようになって、そういうのは無くならないのか・・・無くならないんだらうな。人類が滅亡の淵に立たされても、人種間差別というものは無くならないのだから。

「それじゃあ、アクシズっていうのは何ですか? アクシズが地球に落ちるとかっていう、

凄く物騒な話をしていたみたいですけど……」

「アクシズとは、小惑星基地の事だ。私はそれを落下させて、地球に巢食う愚民共を肅清しようとした。改めて言おう、私の名はシャア・アズナブル……ネオ・ジオンの総帥だ」

「情けない奴！こんな少年にそんな偽悪趣味を發揮しても仕方ないだろう!？」

「言ってくれる……」

「ちよ……ちよつと、喧嘩は止めてください！」

俺は火花を散らしているのが見えそうな2人の間に割って入り、何とか落ち着かせる。

「でも……宇宙に住むようになって、人間同士の戦争は無くならないんですね」

「人は、それ程簡単には変わる事が出来ない……そういう事なのだろうな」

「それを分かっているながら、貴様という奴は……いや、今は止めておこう」

この2人は互いをよく知っているのだろう。だが……今は多分、敵同士なのだろう。なんとなくだが、委員長と彩峰を思い出す。

「次が最後の質問です。……『BETA』を知っていますか？」

この世界にはいない……何故かは分からないが、そんな予感がする。これは飽くまで念の為だ。

「ベータ？」

・
・
・

「ギリシャ文字のβ・・・の事ではないんだろう？すまないが、君の言うベータが何の事なのか、俺には分からない」

「ガルバルデイβの事を言っているようにも見えない・・・私にも、心当たりは無いな」
これで確信した。この2人はBETAが存在しない世界の未来からやって来たんだ。

俺のいた元の世界の未来なのかってところまでは分からない。それでも、その未来には、人類が宇宙に進出する可能性がある。

並行世界の事を2人に説明すると、信じられないという顔をされた。まあ、俺も最初は、信じられなかったからな・・・そこら辺は仕方ない。そう割り切ろう。

「並行世界、か・・・俄かには信じられんな・・・」

「そうだと思います。俺も、最初は信じられませんでしたから・・・」

「君も？それはどういう事だね？」

「ああ、すみません。その話の前にもう一つだけ・・・お2人がここで目覚める前・・・元の世界にいた時に、最後に何か見ませんでしたか？例えば、原因不明の光とか」

「・・・まさか、サイコフレームの光か？」

「しかし、あれは人の意思に反応するものだ。人間を並行世界に転移させる力はおろか、

タイムスリップさせる力など、ある筈がない……」

「そうとも言い切れないだろう？……貴様に言われて思い出したが、俺もサイコフレームの光がアクシズを地球から引き離したのは感じた。質量を持たない筈の光の力が、あれだけの事をやってのけたんだ。俺達2人を並行世界に飛ばすなんて事が起きても、おかしくはないさ」

「……戯言だ」

「言ってる……ところで君、話は分かったが、ここが俺達の世界ではないという証拠はあるのかい？」

クワトロさん……いや、シャアさん？は納得がいかない様子だ。対して、アムロさんは心のどこかで理解出来たのだろうか、俺に問いかけてきた。

「……白銀武です。すみません……貴方達の事が分からなかったので、今まで名前を伏せていました」

「ああ、構わない。君にも、事情があるんだろう？俺の名前はアムロ・レイだ」

「私はシャア・アズナブルだ。先程はクワトロ・バジーナと名乗ったが、君と同じ理由があったので偽名を使わせてもらった。許してほしい」

「そ、そんな……それこそお互い様ですから。それに、今度はきちんと本名を教えるもええましたし……シャアさん、アムロさん、よろしくお願いします」

今更ながらにお互いが名乗りあつて、俺が頭を下げると、シヤアさんはバツの悪そうな顔をし、アムロさんはそれを見て苦笑いしている。

「・・・?あの・・・何か俺、おかしい事言いました?」

「いや、そうではないのだが・・・」

「クククツ、白銀君・・・確かにシヤアもクワトロもコイツの名前ではあるんだが、本名はどつちでもないんだ」

「えっ!?!名前が三つもあるんですか!?!」

「正確には、四つだ。だが、本名は既に捨てたものであるし、例え捨てていなくとも並行世界では何の意味も成さない名だ。それに、二つ目の名も同様だ。なので、シヤアと呼んでもらいたい。・・・アムロ、いつまで笑っている」

「は、はい?そういう事なら、分かりました」

「ククク・・・ああ、すまない。貴様のそんな顔を見るのは初めてだったものだからな。それで白銀君、どうして君は、ここが俺達のいた世界ではないと言えるんだ?」

シヤアさんは唾然とした表情だけど、アムロさんが話を戻した。俺も、話を進める事にする。

「ああ、はい。それは、ここが俺の部屋だからです」

「ほう」

シヤアさんとアムロさんが見事にシンクロした。

やっぱりと言うべきか……この2人は、委員長と彩峰に通じるものがあるようだ。どうにか、仲良くしてほしいな……。

そういえば……さつき、ニユースでシンカイセイカンがどうのこうのつてのがあったな。あれといい、カレンダーといい、机の上の写真立てといい……あの世界とは別の世界なのかもしれない。

「そして、俺も並行世界からやって来たから、貴方達の状況が分かったんです」

その俺の言葉に、シヤアさんとアムロさんは驚く。だが、次の瞬間にはその前の表情に戻す。

こういう切り替えの早さは、俺よりも余程立派な軍人なのだろうと思わせる。

この2人が俺の部屋に転移してきた、という事は何等かの意味がある筈。だとすれば、協力してもらえれば頼もしい。

「なるほど……それで、君の話は聞かせてもらえるのかい？」

アムロさんの問いに答えるべく、話す事を吟味する。

俺と同じように並行世界に転移した人達だからといって……それだけで信用して、すべてを話すという選択肢は無い。特に、オルタネイティヴ4に関する事は……必要な事なら夕呼先生が話してくれるだろうし、2人が先生と話す機会が無いとすれば、俺が

話して良いという訳ではないからだ。

だから・・・ひとまずは、それ以外・・・あの世界の事、俺の体験、そして・・・オルタネイティヴ5の話をしよう。

例え、信用も信頼もされなかったとしても、納得してもらって力を貸してもらえらうに話してみよう。

まず、俺の元の世界の事・・・ある日、突然あの世界に転移してしまった事・・・一度目と想っていた世界を、知らない間に繰り返していった事を前置きとして簡単に話した。

それから、俺の元の世界、そして2人の世界とも違う筈の、この世界の分岐点・・・BETAの襲来・・・そこから辿る人類の敗北の歴史・・・逼迫した当時の状況・・・人類を救う為のオルタネイティヴ計画・・・その第四計画を完遂させる為に魔女と呼ばれるようになった恩師の事。

そして、前回の二度目の世界について。

そこで知った、戦う事の本当の意味・・・戦う人達の気持ち・・・大きすぎる犠牲を払い続けながら、ようやく掴んだ勝利・・・未来への光。

だが、俺はその世界での役目を終えてしまい、残る事を許されなかった。そうして、元の世界に還る筈だった。目が覚めたら、少し違うこの部屋にいて、現在に至ると。

．．．ざつと2時間近くは話していただろうか。

「——という訳で、俺が認識している限りでは、この世界が一度目と二度目の世界と関係しているのかは分からないんです」

「．．．何というか．．．凄まじいな」

「．．．．．」

俺の話が終わると、アムロさんは息を吐き出すようにそう言った。

一方で、シヤアさんは何か、考え込んでいるようだ。ぶっ飛んでいたからだろうか．．．。

「あの、シヤアさん？」

「．．．ああ、すまない。君の話を聞いて、自分という人間の矮小さを自嘲していた。しかし．．．同時に、滅亡に瀕しているにも関わらず、なおも理解し合えない人の業を聞くと、やはり人類は地球の重力から解き放たねばならない．．．という私の考えは誤っていないかったという事が改めて分かった」

「貴様は．．．白銀の話を聞いても、まだそれを言うか！」

「仕方あるまい．．．これが私という人間だ」

シヤアさんの言葉を理解出来た訳ではない．．．だが、言いたい事は分かる気がする。

一度目の世界で、オルタネイティヴ4の中止が決まったと聞かされた時。そして、最

後の反抗作戦に出撃して・・・それが失敗に終わった事の喪失感を、二度目の世界で目覚めて感じた時。俺は、オルタネイティヴ5を・・・それを実行しようとしている奴らを憎んだ。BETAを倒す為に人類が纏まらなければならぬのに、何故、こうも纏まる事が出来ないのかと。

だが、それは結局のところ、自分勝手な考え・・・傲慢で、自分の考えとは違う人の思いを無視して、強要しようとしている事に他ならないんだ。

今の俺には・・・もう人類の勝利だけを目指して進む事は出来ない。シンカイセイカシンというのがこの世界の人類の敵なら、ソイツ等を倒す事は大前提・・・そこは、倒す対象以外は殆ど変わらない。だが、それだけじゃ駄目なんだ。二度目の世界を救えたのは確かだけど、あんなんじゃ駄目なんだ。皆と笑って暮らせるような・・・そんな未来を勝ち取らなければならぬんだ。その為なら・・・例え自分の手を汚す事になっても構わない。

そして、俺に託して逝ってしまった皆の願いも叶えてみせる。

人間がどんなに利己的で、滅亡に瀕していても、一眼となつて力を合わせる事が出来ない愚かな種族だったとしても・・・皆は滅亡なんて決して望んでいなかったのだから。人類の勝利を、信じていたのだから。

だから、シャアさんも・・・。

「あの、シヤアさん。俺は世界を繰り返しているといつても、貴方から見ればまだ若い。貴方の世界の事も分かりませんし、その世界で貴方が何を経験して、今の考えを持つに至ったのかは分かりません。でも……いや、だからこそ言わせてもらいます。……貴方は間違っている。確かに、滅亡の危機に瀕していても人間は利己的です。あの時、まだBETAの侵攻を受けていなかったであろう国には下らない陰謀を企てている人達だっていたでしょう。いや、最前線だった日本にも同じような人間がいたでしょう。でも……そうやって全体を見て、人間の汚い部分ばかりを挙げる事に、一体何の意味があるんですか？もつと身近な人の事を見てください！貴方の周りにいる人達の事を考えてください！あの世界の人間たちがそうであったように、今、この世界の人達も生きる事で精一杯なんです！一年後……一ヶ月後……一週間後……明日……最悪、今日死んでしまうかもしれないんです！それも、兵士だけでなく、民間人までもが！そんな人達……人類が愚かだから、人類の敵に滅ぼされてもいいって、仕方のない事だつて……そんな事を言えるんですか！？そんなの、俺は認めません！絶対に認めない！だから、俺は人類の敵から地球を……未来を取り戻す為に戦う！人類の為に……決して誤じやない。以前まではそうだったけど、今は……俺の大切な人の為に、大切な人達を死なせない為に戦うんだ！……だけど、俺一人だけじゃ、皆を守り通す事は出来ない。どんなに戦術機の操縦が上手くたって、未来を知っていたって、たった一人で出来る事な

んでほんのちっぽけなものだつて事を、嫌と言う程味わされた！この手で皆を守るんだ・・・そう決めていたのに・・・皆の命が散っていくのを、結局・・・俺は止められなかった！だから・・・貴方達の力を貸してください！シャアさん、アムロさん・・・お願いします!!」

捲し立てるように話す俺・・・その言葉を、シャアさんもアムロさんも真剣に聞いてくれた。

・・・なんだろうな。途中から熱くなつちまったのか、俺でも話した内容が分かんねえ。

「・・・すみません。こつちの事情で、勝手な事を言つてしまつて・・・おまけに、『力を貸してくれ』なんて・・・」

「・・・・・・・・」

・・・・・・・・

——沈黙が重い・・・。

シャアさんはまた考え込んでしまつていようだ。アムロさんの方は目を閉じている。シャアさんが話すのをじつと待っているのだろう。

自分が勢いで話してしまつたからなのか・・・そう思うとこの場に居づらい。夕呼先生にも言われていたな。熱くなる癖を直せつて・・・。

「あの——」

「白銀武君、私は君に協力させてもらおう」

突然、シヤアさんが話し始めた。

「えっ？」

「私は、この世界では根無し草だ。する事も無ければ、しなければならぬ事も無い：：ならば、君に力を貸そう」

「ほう……」

シヤアさんの返答に、アムロさんが意外だ、とても言いたげな表情になった。

「なんだ、アムロ。私がこんな事を言うのは意外か？」

「ああ……意外だ。俺はてつきり、貴様ならこの世界での目的を探して、独自に行動するだろうと思っていた」

「フツ……愚問だな。白銀君曰く、この世界の事までは分からないらしいが、BETAとかいうものに近いものが存在するかもしれないという。そして……恐らくは、このままでは人類が敗北し、一度目の世界の二の舞になりかねない、といったところであろう。それは、私の望むところではない。しかし、我々は異邦人……しかも、下手をすれば、一度目と二度目の世界同様、時間が無いという事態もあり得る。ならば、この少年に力を貸すのは道理というものではないか？」

「・・・世界が変わっても、そういう物言いは変わらないな」

「言ったであろう、これが私という人間だと」

「フツ・・・違う。そういう訳だ。白銀君、俺達は君に力を貸そう」

・・・正直、アムロさんが言ったように、俺もシャアさんが協力してくれないんじゃないか・・・そう思っていた。だから、シャアさんの言葉がいまいち理解出来なかった。

でも、地球の為に協力するというシャアさんの言葉は、どこか納得出来るような気がした。

第1話 漂流、そして目覚め

西暦2021年、第二次世界大戦終結から70年余りの時が流れ、この長い平和は永遠に続くとも誰もが信じて疑わなかった。だが、そんな人類を未曾有の災厄が襲った。

突如、海に現れたそれらは漁船や客船を、まるで海の底に引きずり込むかの如く襲い、人類はそれらを討伐すべく、国連軍艦隊を設立した。

だが、それらには従来の兵器では全く歯が立たず、人類は次第に制海権を奪われ、やがてそれらはこう呼ばれるようになった。

『深海棲艦』と。

それから2年、世界は絶望に包まれていた。そんな時、日本で少女達のある力が目覚めた。

その力……かつて第二次世界大戦に身を投じた艦の力を持つ少女達は、世界で初めて深海棲艦を倒した。

やがて、彼女達は『艦娘』と呼ばれるようになった。

艦娘の登場により、人類に希望の光が差したのである。また、兼ねてより研究開発が世界各国で進められていたモビルスーツの本格的な実戦配備がそれに拍車をかけたの

だ。

そして・・・艦娘の登場から、1年が経とうとしていた。

4月21日 午前6時21分 日本 横須賀近海

そこで、4機のモビルスーツと20機ぐらいはある深海棲艦の戦闘機隊がドッグファイトを繰り広げていた。

その4機のモビルスーツは白と紺の2色で彩られており、鷹を思わせるエンブレムが付いている事から、エース部隊である事は想像に難くない。

そのエース部隊——日本国航空自衛隊第4MS小隊『エンデュミオン隊』の隊長であり、『エンデュミオンの鷹』の異名を持つ子安武三等空佐は、愛機であるMTF-01A2『戦雷・壱型乙』を駆り、戦っていた。

「おうおう、どうした？そんな程度で、俺達を殺れると思うなよ！」

子安は深海棲艦の戦闘機達を睨みながら一気に3機撃ち落とす。

『エンデュミオン2、1機撃墜！』

『こちらエンデュミオン3、こっちも1機撃☆墜！』

『こちらエンデュミオン4、2機ぶちのめした』

僚機も敵戦闘機を次々と撃墜していく。そして、残りの敵機はあと1機となった。

「これでラストだ！残念だったな！」

子安は敵機にそう怒鳴ると、躊躇なくトリガーを引いた。戦雷・壱型乙の右手に持たれた23式ビームライフルの銃口からビームが放たれ、吸い込まれるように敵機に直撃、敵機は塵となつていった。

「終わったか・・・さーて、こちらエンデュミオン隊、迎撃成功、帰還・・・ん？」

子安は、海面に先程全て撃墜した深海棲艦の戦闘機以外に何かが浮いているのを見た。よく見ると、その正体は謎の衣装を身に纏った少女、しかも2人も浮いているのが分かった。

『隊長、どうしましたか？』

「お前ら、先に鎮守府に戻れ・・・俺はあれを拾ってから戻る」

『『り、了解！』』

子安のただ事ではないような剣幕の声に動揺しながら、僚機達は先に鎮守府へと帰還していった。子安はそれを確認すると、少女達の元へ機体をゆつくりと降下させた。幸か不幸か、少女達のすぐ側にモビルスーツが1機置けそうな大きな岩があった為、そこに着地させ、機体を降りて少女達の元に駆け寄った。

「しかしこりゃあ・・・一体、何処の艦娘だ？いや、艦娘だったらヤバいだろ。国連軍仕事しろ」

少し胃が痛くなるのを感じながら、子安は目の前で倒れている少女達の正体が艦娘という予測を立てる。だが、それにしてはある筈の艤装が何処にも無く、衣装自体が見た事も無い代物だった為、子安はこの少女達の正体が、艦娘ではない何者かであると言った方がまだ納得が出来るんじゃないかと内心そう思っていた。

「それに、まだ息があるか。．．．まあ、流石の深海棲艦の野郎共もこんな謎だらけの仔猫ちゃん達に爆弾巻き付けるような真似はせんだろ．．．」

だが、このままのんびりとここで油を売る訳にもいかないので、愚痴るのを止めて愛機のコックピットに少女達を眠りを妨げないように押し込み、鎮守府に帰還した。そして、基地に着くや否や、回収した少女達を即座に医務室へと運ばせた。

午前7時9分 横須賀鎮守府 医務室

「．．．う．．．ん．．．」

キアナが目を覚ますと、そこは見知らぬ天井の見慣れない部屋だった。周囲を見回すと、ここが医務室であり、自分がベッドの上に寝かされている事、そして同じ形のベッドが自分のを含めて4つある事から、館内ではなく、ちゃんとした陸の病院なのだろうという予測に行き着くのが無難なところだ。しかし、自分の身体を見てみると、自分が今来ているのは質素な患者服であり、光に飲み込まれて意識を失う直前まで身に着けて

いたものではなかった。更に周囲を見回してみると、誰かの私物なのだろうか、5人組のアイドルの写真集のようなものを見つけた。

「・・・誰？」

もちろん、キアナはこんな5人組のアイドルなど聞いた事も無い。まあ、キアナがアイドルに対してそんなに興味を持っていなかったのもあるが・・・。とはいえ、キアナがこの写真集を見て分かったのはこのアイドルや彼女達に関連するものは過去にテレビやラジオから得た情報の中に全く該当しないという事だけだった。それに、先程ここが何処かの病院だという予測はすぐ付いたが、そうなるか今度はこちらが何処かの病院だとすれば、この病院が何処と関わりを持つているのかが気になるのである。もしもここがヨルムンガンドとの関わりが強い病院だとすれば、またあの時に逆戻り、最悪の場合は殺されてしまうだろう。だが、不思議とここが天命組織、ネゲントロピー、ヨルムンガンドとの繋がりが無い、そんな気がするのである。天命の施設でも、ネゲントロピーの施設でも、ヨルムンガンドの施設でもない。だとすれば、ここは・・・

「ツッ！ そうだ、芽衣先輩は!? 芽衣先輩は何処なの!？」

芽衣の事を思い出し、キアナは自分の目が急激に冴える感覚を覚える。すると、それを守っていたかのように、医務室の扉が突然開かれた。キアナの前に現れたその男性は、20代後半の同年代の女性達のハートを纏めて射抜きそうな美丈夫だった。

「どうやら目が覚めたみたいだな。元氣そうで何よりだぜ……おっと、自己紹介がまだだったな。俺は子安武、日本国航空自衛隊第4MS小隊……エンデュミオン隊の隊長だ。まあ、今は防空任務に回っているんだがな。お嬢ちゃんの名前は？」

美丈夫の話によると、自分と芽衣は海で漂流していたところを子安武——今、目の前にいる美丈夫に助けられたらしい。だが、自衛隊など聞いた事が無い。だが、天命、ネгентロピー、ヨルムンガンド関連の組織ではない事に感謝すると、言つて良いのかと思ひながら、とりあえず自分も自己紹介する事にした。

「……天命組織極東支部所属、キアナ・カスラナ。戦乙女です」

自分の所属を明かした直後、子安の眉が僅かながらに片方吊り上がった。やはり不味かったかとキアナの額から冷や汗が流れ始めた。

「へえ……天命、天命ねえ……お前ら、天命つて組織なんて聞いた事あるか？」

子安はいつの間にか来ていた自分の部下に天命を聞いた事があるかと問う。だが、部下達は3人揃つて首を傾げ、顔を見合わせているだけで、聞いた事が無いといった様子だった。

「……そうか……で、キアナちゃん？その天命つていうのは、一体何処の組織……それか、深海棲艦とどういう関係があるのか？それに、極東……東アジアに天命と関係のあるところなんて、俺の知る限りじゃ聞いた事も無いな」

今度はキアナが聞いて驚くターンだった。何を隠そう、極東支部は自分が律者に覚醒した時に起こった一連の騒動以前に所属していたところであるし、深海棲艦などというものは見た事も聞いた事も無い。大体、世界規模の影響力を持つといつても過言ではないであろう天命組織を知らないなんてそれこそ有り得ない事なのである。

「あの・・・私達は意識を失うまで廃墟に調査する為にそこにいた筈なんですけど・・・私達が目覚めるまでに、何かありましたか？少しだけでも良いんです」

すると今度はキアナが驚くターンとなった。

「廃墟に調査？おい、ちよつと地図持ってきてくれ」

「はいー」

子安の部下の1人が一旦部屋を出て、30秒程経って世界地図を持って戻ってきた。

「ええつと、ここの辺りなんですけど・・・」

キアナが長空市があつた位置を指す。すると、子安と部下3人、医師は目を信じられないと言わんばかりの表情となり、どう考えてもとんでもない事になってきたのを理解した・・・否、理解せざるを得なかつた。

「な、なあ・・・ここって陝西省だよな・・・なあ、こんなところに調査しに行くような廃墟なんて聞いた事あるか・・・？」

「いえ、聞いた事はありませんが・・・でも、廃墟自体なら空き家とかぐらいのボロ家な

らあると思いますよ……というか、ボロ家なんて大都市以外なら必ず1軒くらいはあります」

「そうか……中国政府か国連軍なら何か知っているかも……」

キアナは子安達の話を途中から聞くのを止め、1人今まで得た情報を基に推察していた。子安含む目の前にいる全員がまるで長空市を全く知らないようだし、先程聞いた深海棲艦など聞いた事は無い。新たな崩壊獣が現れたのならともかく、今度はその出所ないし自衛隊等の矛盾が生まれてしまう。

「……おい、嬢ちゃん。ちよつと話を聞かせてもらおうぜ」

子安のその言葉に、嘘や黙秘は許さんと釘を刺されるような感覚を覚えたが、自分も彼から少しだけでも情報を聞いておきたいのもまた事実。キアナは決心して話し合いに応じた。

数分後

「崩壊に天命組織、戦乙女に律者か……」

「深海棲艦に太平洋決戦、艦娘にモビルスーツ……!?!」

互いが互いから齎された信じられない情報を山彦よろしくぼつりと呟く。そしてそのどちらもが全くの事実なのである。

話の途中で隣の医務室担当の看護スタッフから一緒に救出したもう1人の戦乙女：芽衣が目覚ました——彼女の苗字を聞いた瞬間、キアナとその看護スタッフ以外全員が噴出した——と聞き、キアナと子安はその医務室に移動し、子安が彼女にも話を聞くと同じ反応で同じ返答が返ってきた為、盛大に机に突っ伏して「なんてこった：」と嘆いた。なお、3人以外の事の一部始終に立ち会った者達は全員この2部屋を通る廊下でバリケードを張っている。

「・・・それで、お嬢ちゃん達は一応とはいえ、天命組織に所属する戦乙女っていう戦闘員をやっていた、ってか」

「はい。もつとも、長空市で気絶するまで2人で盛大に大ゲンカしてたんですけどね・・・」

結果はこの通り、と言ったところで芽衣がキアナの患者服の袖にしがみ付き、今にも泣きそうなの・・・そして困惑しきった表情で声を出す。

「キアナちゃん、どういう事・・・？」

(こ)、困ったなあ・・・私、芽衣先輩より一つ年下なんだけど・・・

流石の芽衣もこの状況に戸惑いを隠せず、共に冷や汗をかいている子安とキアナも遂にある事案に行き着いたのではあるが、芽衣のこの惨状(?)を前にしてそれをなかなか言えずにいた。

「けどな・・・人類の脅威として見られているのは現状としちゃ、深海棲艦だけだし、崩壊やら崩壊エネルギーやらなんてもんは聞いた事ないぜ。というか、そもそもそんな代物が存在して、しかも5万年くらい前から確認されていたとすりゃ、世界中の科学者が大パニックになって、キリスト教の信者達がこの世の終わりだとか再臨だとか叫びまくるんじゃないか？そんでネゲントロピーってところが造って運用しているっていう4〜5m級の機動兵器だが、航空自衛隊や陸上自衛隊・・・いや、世界中で運用されているモビルスーツは18m前後のが殆どで、そんなにちっこいもんじゃない。終いにゃ、その動力は殆ど場合が崩壊炉ってやつじゃなくてバッテリーだ。試作機の中にはガスタービンで動く代物もあるって話だが、コスト面じゃ、バッテリーに負ける。こうも食い違くと、恐怖や困惑通り越して呆れ返っちまう」

ちなみに、先程子安、キアナ、芽衣の3人以外の全員はこの医務室2部屋を通る廊下でバリケードを張っていると言ったが、その理由はキアナ達から得られた情報があまりにも荒唐無稽で俄かには信じ難いものだったのが3割、そして残りの7割が奇しくも芽衣にあったのである。

「・・・とは言ってもな、芽衣ちゃんの苗字を聞いた時、キアナちゃんの話よりも質の悪いドツキりに嵌められたような気分になったぜ。雷電なんて、下手すりゃぶらずまの新たな犠牲者になりかねんだろww」

「芽衣先輩は関係無いでしょ!? 幾らなんでもそこまで酷く言われたら怒るから!!」
「お、おう……すまんすまん……」

あの時思っていたのと違う意味とはいえ、天地がひっくり返るような現象に本当に巻き込まれたという事実を認めたくないが故に、子安の巧みな話題逸らし(?!) テクニクにキアナは怒りを露にする。子安はやりすぎたかと謝るが、芽衣の様子を見ると、これが最善だと速攻で判断したし、こうする他無かったのが一番の理由と言っても良いだろう。

「失礼するよ」

その空気に新たな風を吹き込んだのは、医務室に入つて来た新たな人物だった。

「か、鹿島総理!？」

「子安三佐、恐らく彼女達は異世界から来たのだろう」

キアナと芽衣は、入つて来たその男に目を向ける。そこにはやや長めな黒髪の子安に負けないくらいに男性がいたのだ。

「先程、彼女達が持っていた物を一式見たよ。仮に彼女達が艦娘だとしても、あれらの中に混じっていた剣以外に武器は無かった。鎧のような物もあつたのはあつたが、ふつうに考えても、深海棲艦の攻撃が直撃したら防ぎきれるかどうか不安だね。それなら、艦装を盾にするか、避けた方がまだ安全だろう。衣服にも触れてみて分かつたのは肌触り

もこれまた従来の物とは違う。ここまで来れば、何処かの艦娘か深海棲艦のスパイと考えるより、異世界から来たたと断定する方が納得が行くよ」

「・・・それで、総理は彼女達が帰る方法は何かあるとお思いで？」

「フフフ・・・私は超常現象にはそこまで詳しくないから、そこまでは分からんよ。ただ、彼女達にとって残酷な事を言うようではあるが、彼女の話が事実だとすれば、このまま帰らない方が彼女達にとって、幸せではないかな？」

鹿島という、総理と呼ばれている事から国のトップなのだろうこの男は帰る事が出来る可能性についてバツサリと切り捨てる。その言葉に芽衣は俯き、キアナも一瞬その言葉に怒りを覚えたものの、すぐに納得した。元の世界に戻ったとしても、その世界を救う事が出来ても滅んでしまっても、その後の自分達の行き着く先は己の身が朽ちる様ただ一つであるという事は変わらない。自分は世界を救う為ならば死んでも良かったのだが、天が自分がそういう形で死ぬ定めではないと自分と芽衣にあの超常現象を以て告げたのではないかと不思議とそう思い、納得出来るような気がしたのである。戦乙女として、もう充分使命を果たしたのだという事も含めて。

「では・・・戦乙女という戦闘員である彼女達も深海棲艦との戦いに送り込む、と？」

「いや、正直に言つて、彼女達はこの世界に住処どころか身内すらいない。戦い云々以前に、まずは衣食住と職を得なければ生きて行く事は出来ないだろうね。尤も、職につい

ては私の友人が成子坂重工社長を務めているから、そこに就職するのが一番手っ取り早いかもしれない」

どうやら鹿島の友人はとある企業の社長なのらしい。訳ありでないならば、とりあえずは大丈夫だろう。

「どうするの、キアナちゃん・・・？」

芽衣はまるで親からはぐれてしまった子供のように袖を掴みながらキアナにそう聞く。とは言っても、今の現状では、このまま自衛隊に入るといいうのも気が引ける。

「軍に入る以外に方法はありますか？」

「うむ、さっき言った通り、私の友人は成子坂重工という企業の社長で、そこに就職するのが一番手っ取り早い方法だと思う。それなら、身元引受人も私か彼がなる事になるから、一番安全でもあるだろう」

鹿島の言葉に、キアナは芽衣の方を見る。今の芽衣には、かつての精気が無く、自分が少しでも目を離したら暴走しかねない。瞳にも光が宿っていないようにも見え、これだけでも不安に思えてくる。

「・・・分かりました。成子坂重工に入ります」

キアナ一人であれば、自衛隊とやらに入っても何ら問題は無いだろうが、芽衣がこんな状態では、戦闘に関わらない方が最善の策だろう。それにそもそもこの世界で手に入

れた情報があまりにも少なすぎる。故にキアナは自衛隊入りを捨てたのである。

「心配する事は無いよ。最初の1ヶ月は私がこの世界について教えるし、成子坂重工では必要になってくるだろうモビルスーツの操縦については私から彼に頼んでおこう。成子坂は日本のモビルスーツ開発に携わる企業で、モビルスーツの性能テストを行う事もあるが、余程の事が無い限りは実戦に出る事は無いから、これについては私が保証しよう。ああ、そうだ。念の為、偽名を考えておいた方が良いと思うよ。強制はしないから、使うかどうかは君達次第、と言っておこうかな」

その言葉を聞き、キアナは頷いた。

時に2024年4月21日、キアナ・カスラナと雷電芽衣は自らの知る世界とは異なる世界で生きる事となった。

第2話 自由と鷲

成子坂重工・・・元々は重工業に携わるだけの中小企業であったが、坂本浩一——鹿島の大学時代からの友人である彼が社長に就任してから2年後に日本のモビルスーツ開発に参画した事で大きく成長、今や日本を代表する大企業の一つとなっている。

キアナと芽衣を拾ってくれた子安と現在の総理大臣である鹿島は共に浩一の友人である為、キアナ達にとつてはある意味、怪我の功名と言っても過言ではないような、願っても無い事だったのである。

実は浩一は、この世界における知る人ぞ知る剣術の伝承者であり、現在は弟子を絶賛募集中なのだとか。尤も、キアナも芽衣も浩一がマネキン相手にそれをやるのを見てからというものの、戦乙女やら律者やらなどという考えはすっかり消え失せてしまったのだが。

2024年 7月4日 午前10時33分 日本 東京都 成子坂重工本社

それはさておき、キアナと芽衣はそこで社員研修を受け、技術開発部のメンバーになる為の資格を取得した。幸い、2人は姫子から有事の際に重機を扱えるようにしておけ

と言われて自分達の身に叩き込まれた重機の操縦技術がモバイルスーツの操縦で遺憾無く発揮され、たった1ヶ月程でモバイルスーツの操縦ライセンスを取得する事が出来た。

「やっとな手に入ったよ……」

軍が前線等で運用するような兵器のライセンスとはさほど思えないような、自動車免許証のようなライセンスに貼られた妙に変な顔写真を眺めながら、キアナは更新する際にはもつとまともな顔つきになってやろうと心から誓う。そして、その横の氏名の箇所には『雷電紀亜奈』という文字が記載されている。そう、キアナは過去の因縁を断ち切る為に偽名を使う事にしたのだ。なお、キアナの余命についてだが、なんと奇跡的にあと数十年ぐらいいまで戻り、普通の人間と同じような生活を送る事が出来そうだと診断した医師もびつくりするほど体調が良くなったのである。

そんな事は概ね関係無いが、幾ら技術開発部に入る事になっても、肝心の資格が無ければ何も出来ないのだ。現に鹿島からは資格は自力で取得するよう言われている。

「あつ、いたいた。キアナちゃん！」

そう言つて、キアナの元へ駆けつけて来たのは芽衣だった。

「んっ……お待たせ、姉さん」

明らかに今までは違う呼び方だったが、すぐにキアナを見ながら微笑む。芽衣もキアナを自分の妹という事にしており、キアナの偽名もその為に作られたのである。尤

も、そうした事で芽衣自身は偽名を使う手間を省く事が出来たのだが。

「しっかし、ここに入る為の資格を一通り取得するのに3ヶ月近くかかるなんてね」

「まあ、幾らどういう事情があつたとしても、私達を特別扱いしないって話だからね：まあ、姫子やフカ、ウエンディの墓を用意してくれたのはありがたいけど」

キアナもこの待遇には納得していた。子供ではないから、と強がるなどとは言えないが、自分が特別扱いされる事自体を元から求めていない、というより拒んでいるのだからと自分でも理解している。元の世界に帰る方法が無く、この世界に骨を埋める覚悟もしなければならぬ事も。

「でも、この世界に来てからは皆が死んだっていう実感が湧かなくなってきたな・・・特に姫子とフカなんか、2人で肩抱き合いながら突然出て来て『勝手に殺すな!』なんて大声で言いそうで」

「あ、アハハ・・・」

キアナがそう言うのと、芽衣は苦笑いする。今や、キアナがこの世界に来る直前に芽衣との戦いで使つた天火聖裁（現在はビニールで包んでクローゼットの中に保管されている）と芽衣が雷の律者に覚醒するまで愛用していた日本刀の二つしか、自分達が元の世界で生まれ育ち、そして戦つた証は無いのである。

「・・・あつ、そうだ。今から墓参りに行かない？資格も取つた事だし、これから忙しく

なりそうだから……」

技術開発部で本格的に働く事になれば、いつでも墓参りに行ける程の余裕が無くなるかもしれない。なので行けるうちに行こうと芽衣が提案する。キアナはそれに賛成し、早めに済ませておくかと2人で本社から近くの寺へと向かった。

午前10時39分 本社の近くにある寺 墓場

ここは、有名な俳優が納骨された墓場。そこにキアナ達はやって来た。キアナは、行く途中で花屋で買った花束を3つ抱えている。深海棲艦との戦いの影響か、墓石が若干多くなつてきて所々乱立している。キアナ達も契約したスマホのメモアプリに場所を記していた為、すぐに当てる事が出来た。

「ん……?」

今日に限って、その近くに墓に1人の少年がいた。海上自衛隊の幹部候補生学校の制服を着ていたので、おそらくその生徒なのだろう、黒い髪と茶色い瞳、おまけに美しい顔立ちときた。校内トップクラスの人気者だと2人は思った。

その少年は姫子・フカ・ウエンデイの3人の墓の隣にある墓の前で真新しい立っており、彼はそこから3人の墓を見ている。

「……その墓、貴女達の知り合いですか?」

少年はキアナ達にそう問いかける。

「・・・うん」

答えるべきかと思ひ、キアナは答える。

「そう、なんです。俺、実は3年前に呉から越してきて、それから毎月、ここに墓参りに来てるんです。けど、ここ3ヶ月は勉強で忙しくて・・・それで今日来てみたら、新しい墓が経っていたので・・・外国人の名前もあつたので、つい気になつたんです」

なるほど、少年はこの墓場にいつも来ているのか。ならばとキアナも頷きを返し、こう問いかける。

「そのお墓は誰の・・・?」

「・・・親戚の墓なんです。航空自衛隊のパイロットでした」

少年の回答に対し、キアナ達は今まで見た悪夢を思い出し、少し視線を落とす。崩壊こそこの世界には無いが、自分達が見た悪夢のような光景に似たものは、この世界では未だに後を絶たないのだ。

「・・・やっぱり、戦争で?」

芽衣も少年に問いかける。少年は親戚の墓の方に目を向けて口を開く。

「・・・ええ。撃墜された機体ごと陸地に墜ちて・・・でも、遺体が回収出来ただけまだ良い方だと思っんです」

「……遺体が回収出来ただけまだ良い方って……」

芽衣の反応を聞きながら、少年は墓に水をかけ、両手を合わせて目をつむる。

「……俺の父も、海上自衛隊にいたんです。まやっという護衛艦の艦長で、俺の憧れの存在でもあった。そんな父は……父さんは、深海棲艦に殺された……まや諸共沈んで……遺体すらも深海棲艦がいたせいで回収出来なかつたって……父さんは帰る事さえ許されなかつた……肉体どころか、骨一本すら……」

キアナはそれを聞いた時、ある事を思い出した。かつて身体の自由を空の律者に奪われ、姫子との戦いをただただシーリンが動かす自分の身体の目で見る事しか出来ず、姫子を見殺しにしてしまったあの時の事を。

少年が同じような苦しみを抱いている自分に似ている気がした。そう感じたからか、キアナは無意識のうちにこんな事を言った。

「それでも……運命に立ち向かうしかない……」

キアナの言葉に芽衣はバツが悪そうに小さく頷く。少年はというと、呆気に取られたような表情をしたが、すぐに表情を戻し、軽く礼をしてからキアナ達の横を通り過ぎる。「……確かに貴女の言う通りだ。俺にとつて、父さんの仇を討つ事が父さんへの手向けであり——」

そしてキアナとニアミスした刹那、少年はこう呟いた。

「俺が運命に立ち向かう為に出来る、たった一つの手段でもある——」

午前10時47分 成子坂重工本社付近

キアナ達は少年と別れた後、本社に一番近い、自宅のあるマンションへと向かつていた。元々荷物があまり多くない為、整理する手間はそれほど必要が無いが、念の為に手荷物を用意する事にしたのだ。だが、それとは裏腹に、キアナの表情は優れない。先程の少年のあの言葉がどうも引つかかっていたのだ。復讐が、自分が運命に立ち向かう為に出来る唯一の手段だというあの言葉、それが彼が海上自衛隊に入る志なのだろう。だが、そう考えると、どうしても否定的になってしまいう自分がいるのだ。

「キアナちゃん……さっきの話、忘れよう……?」

芽衣の気遣いも嬉しかったが、それを聞く度に少年に対する不安が大きくなっていく。彼は運命に立ち向かう事がどれ程困難なものなのかを、父親の死を以て思い知らされたのではないのか。そう考えれば、あの言葉に概ね納得が行くように思えたが、同時に彼がどれ程までに繊細なのかも解つてしまいそうな気もしたのだ。復讐で自分の身が朽ち果てるのが運命ならば、せめて死者の無念を晴らせるよう抗えと。この世に生を授けた者ならば、死ぬまで生きる事に尽くせと。自分が出来る事があるのならば、それ

を最後までやり通せと。そう彼が言ったような気がしてならないのだ。

「本当に、それで良いの……?」

キアナは少年の言葉を否定するようにそう呟く。だが、ただ否定している訳ではない。復讐という手段で運命に立ち向かう彼と、自らの業を背負って運命に立ち向かう自分とは違うという意味もこめられていた。

ウウウウウー……ウウウウウー……!!!

突如として辺り一帯に警報が鳴り響く。この警報音が鳴り響く意味はただ一つ、深海棲艦の襲撃のみである。

「逃げようッ!!」

芽衣より早く我に返り、キアナが叫ぶ。そして、キアナが走り出した直後に芽衣も後を追う。民衆で溢れ返っているルートはまず除外し、人がいないルートを見つけては通り、見つけては通りを繰り返す。次第に深海棲艦の艦載機達が上空にだんだん姿を現していく。

「早くしないと……このままじゃ死んじやうわ!!」

芽衣が悲鳴のような声を上げる。だが、キアナ達を深海棲艦の艦載機達の出現以上の最悪な事態が容赦なく襲う。なんと逃げた先に2機のモビルスーツが道を塞ぐように倒れ込んでおり、そのすぐ近くには2人の男女が倒れていた。

一方はディアクティブ状態のフェイズソフト特有のグレーを基調とした、背部に大きなウイングユニットの付いたガンダムヘッド（GAT-Xシリーズの全ての機体が日本のガンダムシリーズのうちのたとある一作のそれと全く同じだった事からガンダム顔の機体はよくそう呼ばれている）の機体、そしてもう一方は紫と緑つぼさなある青の2色で彩られた、宇宙人を彷彿とさせる形をした頭の、可変機構を備えていそうな機体であり、どちらもキアナ達の知らないモビルスーツだった。腰部の折り畳み式射撃武器の砲身が両方ともポツキリと折れてしまっているガンダムタイプの方は胸部の、ガンダムタイプ程の損傷は無さそうな見た事のないタイプの機体の方は腹部のハッチが開いたままになっており、中に入る事は出来るだろう。

そして、2機のすぐ近くで倒れている、日本国自衛隊の青色のパイロットスーツを着た茶髪の青年と紫色の水着のような服を着た水色ショートヘアの少女の姿。2人共、何箇所かケガをしているものの、どれも大したものではない事から命に別状は無さそうだが、目を覚ます気配がない。だが、この光景とは関係無しに、いつ深海棲艦の艦載機達が自分達を襲って来るかもわかったものではない。キアナは腹を括った。

「しようがない・・・芽衣先輩、その子を連れてそっちのモビルスーツに乗って！私はこの人を抱えてあっちのガンダムタイプに乗る!!」

キアナの指示を聞いた芽衣は少女を抱いて紫色のモビルスーツに乗り込む。キアナ

は芽衣が少女を抱いて走っていくのを確認すると、青年を抱えてガンダムタイプに乗り込む。キアナと芽衣がそれぞれ乗り込んだ2機のモビルスーツはモビルスーツ操縦のライセンスを取得するまでの段階で扱った機体とは見た感じの構造だけでなく、コックピットにも多少の違いが見られたが、扱いきれないという訳でもなかった。即座にハッチを閉じ、キアナと芽衣はそれぞれイグニッションスイッチを押す。

MOBILE SUIT NEO OPERATION SYSTEM
Generation

Unsubdued

Nuclear

Drive

Assault

Module

Complex

ZGMF-X10A FREEDOM

「フリーダム、か……って、何これ？プロテクト？適当にやれば……」

キアナはそう言いながらキーボードを打つ。すると……。

「よっしゃ！プロテクト解いたった！これで、難なく動けそうかな……武装は、何か使

えるものは……」

運良く(?)プロテクトを解いたキアナは、武装の確認に移る。

WEAPON SYSTEM CHECK

MMI|GAU2 PICUS《EMPTY》

MA|MO1 LACERTA《OK》

MMI|MI5 XIPHIA《ERROR》

MI00 BALENA《OK》

「クスイフィアスってのがイカれてる……腰のレールガンみたいなヤツがあれ？ 頭部バルカン砲も弾切れで……使えるのはビームサーベルとプラズマ収束ビーム砲、これだけか……ん？」

使える武装を一通り確認し終えた直後、キアナはある事に気が付き、恐る恐るOSの画面をもう一度見る。そして、っその文字の中のあるところがキアナの視界の中央に写った時、キアナは今度こそ息を呑んだ。

Nuclear

Drive

「まさか、これ……核動力なの!？」

キアナはモビルスーツの動力に関して少し詳しく調べた事がある。故に核で動く機

関の類はMS用の、十分な性能と安全性を持つエンジンの開発に難航しており、未だに核エンジン搭載型MSは実用化されていないという情報は知っていた。

だが、このモビルスーツ：フリーダムは、実用化が難しいとされた核エンジン：更に詳しく言うくと、核分裂でエネルギーを生み出す原子炉を動力としているのである。そんな夢の核で動くモビルスーツが何故こんなところに・・・しかも、一部武装が破損し、不時着した状態で・・・。

『キアナちゃん、こっちの機体はフレズヴェルクっていう機体らしい！ガンポッドは両方とも弾切れになってるけど、ベリルショットライフルってのは問題なく撃てるわ！そっちは!』

「えっ・・・う、うん！こっちはフリーダムっていうらしいよ！今使える射撃武器がウィングユニットのビーム砲だけだよ！」

『そうなの——ッ!?き、キアナちゃん!!』

芽衣の悲鳴に思わず前を向く。すると、上空から爆装した深海棲艦の艦載機が急降下爆撃してきた。キアナは咄嗟の判断でフェイズシフト装甲の起動スイッチを押し、防御の構えを取る。

フェイズシフト装甲がアクティブモードに入った直後、爆発と衝撃がフリーダムを襲う。

「ぐううツ・・・!!」

だが、フェイズシフト装甲を起動させたお陰で、機体にダメージが入らずに済んだ。

「あ、危なかった・・・これがフェイズシフト装甲か・・・!!」

キアナが感嘆の声を漏らす。しかし、このままではギリ貧である事は変わらない。このまま防御してやり過ぎすのも手ではあるが、近くに人がいる可能性がある以上、最良の選択肢はただ一つ。

「でえええーいッ!!」

キアナはフリーダムを離陸させ、先程爆撃してきた深海棲艦の艦載機に照準を合わせる。

「当たれ!!」

キアナはトリガースイッチを押し、バラエーナの砲口から赤いビームを放つ。2門のバラエーナから放たれたビームは、吸い込まれるように深海棲艦の艦載機へと延びていき、深海棲艦の艦載機を消し炭にした。

だが、敵はこの1機だけではない。キアナはレーダーに新たな機影が自機を表すレーダーの中心に近づいて来るのを確認し、近づいて来る深海棲艦の艦載機達に機体向け。向かって来る深海棲艦の艦載機は4機、小規模の編隊を組めるくらいの数だ。

「なら、これをを使うか!」

キアナはフリーダムダムの右手に、右腰部に固定されているビームサーベルを持たせる。そして……

「……今だッ!!」

フリーダムが横薙ぎにビームサーベルを振る。そして深海棲艦の艦載機達はフリーダムを横を通り過ぎた直後、爆発四散した。

「……へっへーん! どんなもんよ!」

そうキアナが勝ち誇った、その時だった。

『所属不明のモビルスーツに告ぐ! こちらは日本国航空自衛隊だ! そちらの所属を言え!』

横須賀の方向からやって来た戦雷・壱型乙がキアナの駆るフリーダムに銃口を向けながら警告をする。キアナはそのパイロットの声を知っていた。

「その声……子安さんですか!」

そう、戦雷・壱型乙のパイロットは子安武だったのだ。子安は思わず目を見開く。

『おまつ、その声……キアナちゃんか!? なんでそんなモビルスーツに……』

「すみません、これにはちよつと事情が……芽衣先輩はあのモビルスーツに乗ってます!」

『そ、そうか……まあいいか、ちよつと話は聞かせてもらうぜ。いいな?』

「分かりました」

子安の声にキアナといつの間にか通信に割り込んでいた芽衣は頷く。こんな曰く付きのモバイルスーツで暴れたのは事実であるので、こういう展開になってもおかしくないだろうと思っただので、キアナと芽衣はそれほど慌てなかった。

第3話 初陣を終えて

午前11時28分 神奈川県 横須賀鎮守府 仮設テント

キアナは鎮守府内に設置された仮設テントで子安から取り調べを受けていた。何故仮設テントの中でのなのかという点、実は先の空襲により、横須賀鎮守府の執務室付近に深海棲艦の艦載機達が落とされた爆弾の一つが直撃し、提督もこれによって戦死してしまったからである。幸いにも、大和という艦娘の飛び入り参加によって、鎮守府の被害はこの程度で済んだらしく、艦娘達の中から死者は出なかった為、鎮守府の修復と新しい提督の着任が完了すれば、すぐにでも解決出来るものだったが……。

「……で、あのフリーダムっていう羽付きとフレズヴェルクっていう可変MSを避難所代わりにして深海棲艦の艦載機と戦っていたってどこか」

「はい。私と芽衣先輩は、その2機のモビルスーツのすぐ側で倒れていた男女を見つけ……コックピットが開いていたので飛び乗ったんです」

「……しかし、航空機相手にほぼ単機って状況で……しかも4機をビームサーベルで一纏めに薙ぎ払うなんてな……センスあるんじゃないか？そうじゃなくても、機体の性能のおかげって言えるぞ」

子安はキアナを慰める。どんな過去を持っていたとしても、キアナも芽衣もモビルスーツに乗って実戦を体験するのは今日が初めてなのだ。

「と言っても、いろいろ調べなきゃならない事もあつてな。とりあえず、フリーダムとフレスヴェルクは一旦こっちで接收するからな」

「分かりました」

取り調べが終わり、キアナは子安に礼をすると、テントから出た。そのキアナの前で待っていたのは一人の男だった。

「キアナ、一体何をしている？」

その男、浩一は想定外のトラブルに巻き込まれたのとキアナと芽衣が勝手にとった行動に対する呆れと怒りの表情でキアナを見ていた。

「まあ、深海棲艦の襲撃に巻き込まれた以上、これ以上は何も言わないでおこう」

「・・・すみません」

「二応、ビデオデータは私も見たが・・・これがまた想定外な事だ」

浩一の話によると、キアナがフリーダムを駆り、あの戦闘の終盤で4機を墜としたあの斬撃は普通ではモビルスーツで出来る動きではなかったという。

「これは、操縦というより・・・個人で習得した剣技に等しい。後々話す予定ではあるがね」

車に乗り、2人は病院へと向かった。

午前11時48分 とある病院

病院に到着し、2人は院内に入る。待合室にいた芽衣はキアナと浩一が自分に向かって歩いて来るのに気づくと、2人に駆け寄った。

「それで・・・姉さん、あの2人の様子は？」

「少し前に、2人共目を覚ましました。ですが・・・」

芽衣がどう答えれば良いのか見当がつかない様子であるのを悟った浩一だが、話してもらわない以上いくら待っても話は進まないだろう。浩一は芽衣に重ねて聞く。

「その2人の様子はどうなんだ？」

浩一はキアナと同じ内容の質問を芽衣に投げかけるが、キアナの時とは違い、浩一の声には圧が感じられる。芽衣自身もそれを感じたのか、口を開く。

「2人共、記憶が無いって・・・でも、薬物投与された訳でもないし、一度話してみても特におかしな点は見つからなくて、あの戦闘に巻き込まれただけかも・・・」

芽衣は戸惑いながらそう言う。だが、キアナはそれよりも気になる事があった。ある仮説・・・確信に近い仮説であった。

「なるほど・・・では、その2人と話し合うとするか」

浩一がそう言い、2人のいる病室に入ると、キアナと芽衣もそれに続いて病室に入った。そこには、あの青年と少女が自分の置かれた状況を気にする事無く笑っていた。尤も、青年の方は少し微笑む程度だったが。ついでにあの空襲の時に着ていたパイロットスーツから患者服に着替えさせられていた。特に青年の方は美しいフォルムの身体で、キアナが思わずそれに見入っていると、瞳の光が消えた芽衣が後ろから抱き着いてきた。浩一も冷や汗をかきながら明後日の方向を向いて口笛を吹く。

「あっ……お帰り」

「お帰りー。どうしたの?」

記憶喪失の2人は芽衣にそう言う。すると、浩一は2人に対して問い始めた。

「まず始めに……君達の名前は?」

「……分かりません」

「分からないよ」

「……あの場所で、何があつたのだ?」

「……すみません、それも分かりません」

「僕もだよ」

「……両親や家族は?」

「……両親……家族……」

「それは僕が知りたいよ!!」

質問の結果として分かったのは、記憶喪失の話が本物であるという事、そして少女の方は家族に関する事になると感情的になるという事の二つだけだった。また、芽衣曰く、打撲や切り傷も軽いものだった為、すぐに退院する事が出来るらしい。

「まあ、家族に関しては私の方で調べておこう・・・キアナ君、少し話しておきたい事がある」

浩一はそう言つて、キアナを連れて一旦部屋を出る。キアナも彼に対して話しておきたい事があるのか、すんなりと了承した。

「・・・キアナ君、君のあの2人についての考えを聞きたい」

やはりと言うべきか、浩一もキアナが思い浮かんだある仮説——否、確信にたどり着いていた。彼の表情は、サスペンスドラマによくありそうな推理している時の刑事のそれを思わせるだろう。

「・・・率直に言いますよ。行方不明者リストどころか、戸籍を持っているかどうかすら怪しいですね」

「・・・と言うと、もしや・・・」

「はい・・・つまり、あの2人は——」

フリーダムとフレズヴェルクのパイロットって事です」

その答えを聞き、ようやく浩一はそう言う事かと言うように表情を戻す。あの2人を、フリーダムとフレズヴェルクのパイロットであると言い張る方が、一番納得が行く結論と言うべきものなのである。

「芽衣君は……気付いていないのか？」

「……多分、無意識のうちに切り捨てたんだと思います。私達が天命を抜けたのも、裏切られたようなものが理由での事ですから……」

過去を思い出し、キアナは表情を強張らせる。浩一はそれを見ると、こう言った。

「あの2人の身の周りには気を付けるべきだ。あの2人をこのまま放っておけば、強制労働行きはほぼ確定だ」

「それって——」

「一応調べてみるが、収穫は期待できないだろう。私達でさえその確信にたどり着いたのだ。邪な連中に存在を知られれば最悪の事態は免れない」

そして数秒程目を閉じた後、目を開いて話を続ける。

「そこで、だ。キアナ君、芽衣君と2人で技術開発部で働くだけでも何とかなるだろう。だが……あの2人とセットでとなると、どうしても不安要素が残る。芽衣君を呼んで来てくれ」

キアナは息を呑む。浩一が言いたい事はただ一つであるという事に気付いたからで

ある。

キアナは芽衣を連れて浩一の許に戻ると、浩一は2人にこう言った。

「雷電芽衣並びに、雷電紀亜奈……いや、キアナ・カスラナ。最早、こればかりは選択肢は一つしかあるまい。航空自衛隊に出向を命ずる」

「……了解！」

キアナは浩一に敬礼をし、その社長命令を受けた。

こうして、キアナ達の……この世界で交わり合う者達の新たな戦いが始まった。

第4話 誘われし者達・前編

午前11時29分 東京都 とあるアパート

ピピピピツ ピピピピツ

「……うくん……」

ピピピピツ ピピピピツ

「……もう朝か……」

耳元で鳴る目覚まし時計のアラーム音に起こされ、少女は目を覚ます。背丈からして高校生なのだろう。

「ふわああく……」

少女は目覚まし時計のアラームを止めると、背伸びをしてあくびをした。そして、時刻を見ると……

「あれっ!?もうこんな時間!?大変大変!!」

なんと目覚まし時計が示す今の時刻はもう11時半を指しているではないか。これを見た少女の目が冴えた。

「なんで轟雷起こしてくれなかったのー、ってあれ?」

ここで少女はある事に気付く。そう、自分の家で共に暮らしている筈の同居人の姿が無いのである。

「うくん……でも、急がないと学校着く頃には12時過ぎちゃうー!」

少女は大急ぎで着替えると、朝食・・否、この時間帯では最早昼食と言った方が良いであろう食事も摂らずに玄関へダッシュする。

「行つてきま——」

そう言いながら開けた玄関の先を見ると——

「……え?」

少女……源内あおは本来ならば絶対に見る事の無い筈の光景を目撃した。

「なんか……あっちこちから煙が立ってる——!」

同時刻 アメリカ合衆国 ノーフォーク基地近海

その海域の小さな岩場に、1機のモビルスーツが鎮座していた。

機体の色は武装を除いて金属の類であればよく見るような艶のある灰色を基調としたもので、一目でダイアクティブ状態のフェイズシフト装甲である事が分かる。

「……んっ」

そのモビルスーツのコックピットで気を失っていた赤いパイロットスーツを身に纏

う一人の少年が目を覚ます。

「・・・なんで俺、モビルスーツのコックピットの中で眠って・・・」

そう呟いた直後、少年はある事を思い出す。

(そういえば、何かミネルバが嵐に遭遇して、ロゴスの襲撃に備えろって事でデステイニーのコックピットで待機してたんだっけ・・・ん?)

刹那、少年の目が冴えた。

「はッ、そうだ! ルナ・・・レイ・・・ミネルバはどうなつたんだ!」

少年は周波数を合わせると、無線で呼び掛け始めた。

「こちらデステイニー。ミネルバ、応答願う!」

だが、少年の呼び掛けに応じる気配が無い。

「こちらシン・アスカ! ミネルバ、応答願う!!」

少年——シン・アスカは再度呼び掛ける。だが、返事は一向に返ってこない。どうやら、自分は遭難してしまつたらしいとシンは理解した。

(何かあつたんだ・・・ミネルバに何かが)

シンはそう仮説を立て、考え始める。自分がジブラルタルで受領した新たな愛機であるモビルスーツ——ZGMF-X42S『デステイニー』に乗り込み、オペレーション・ラグナロクに参加すべくヘブンズベースへと航行していたミネルバの格納庫内で待

機していた筈が、何かの拍子に機体ごと外に投げ出されて漂流し、いつの間にかここに流れ着いていた。しかも、ミネルバとの通信が繋がらないという事は、ミネルバから相当離れてしまったという事である。だとすれば、ここは一体どこなのか——

シンが思索に耽っていると、突如としてコックピットに警告音が鳴り響いた。デステイニーのレーダーが何かを捉えたのである。どうやらその何かは複数存在し、陣形を組んでレーダーの中央・・・こちらに向かって進んでいる。データ照合を試みたが、そのどれもがUNKNOUNという文字が追加で表示されるだけであった。

「まさか、新型か・・・ん?」

だが、シンは続けざまにある事に疑問を抱く。

「アンノウンの高度はほぼ0m・・・!?それに人間サイズって・・・モバイルスーツでも艦でもないのかよ!」

そう、その何かの動きと大きさだった。

何かは揃いに揃って海面に足が絶対ついていそうな高度で移動しているのだ。それも人間サイズの、である。

これはいよいよとんでもない事になって来たぞとシンが警戒を強めると、集団の中央の何かから通信が入って来た。

『こちらアメリカ海軍第3艦娘中隊。所属不明のモバイルスーツ、応答願います』

驚いた事に、その声は女子高校生のそれであった。シンはその声に戸惑いながら、自殺覚悟で返事をする事にした。

「こちらZ A F T軍特務部隊、こちらに戦闘の意思は無い。そちらの要求に従う」

いくらデステイニーといえども、今ここで抵抗したところで、母艦も無しに包囲されてしまえば、多勢に無勢で持久戦に持ち込まれて確実にアウトだ。包囲網を突破する事が出来れば、生きてジブラルタルに帰還してミネルバに合流する事が出来るかもしれないが、今自分に迫ってきている何かの戦闘能力は全くの未知数。触らぬ神に祟りなしという諺もあるくらいなので、十二分に注意して対応した方が良いかもしれない。

そうシンは考えたのだ。

『ハッチを開けてモビルスーツから降りて下さい』

何かからの返答はシンの予想通りで、シンはそれに応じてハッチを開け、両手を挙げてコックピットから出た。そして、向かって来る何かを見たシンは思わず目を見開いた。

来る者全員が、謎の装備を身に着けた美少女だったのである。男など、1人も混じっていない。

何か——いや、彼女達がシンの姿を確認する。その直後、アホ毛のある銀色のロングヘアの少女が一步（？）前に立ち、口を開いた。

「私はアメリカ海軍第3艦娘中隊所属、ノースカロライナ級USSワシントン。貴官の所属と名前を言え」

シンは、自分が今まで見た連合兵（尤も、ステラやネオは例外のようなものだが）より理性を持っているなどワシントンと名乗る少女に対して思った。現プラント最高評議会議長であるギルバート・デュランダルがロゴスの存在を暴露するまで、連合はロゴスの操り人形となっていた為にコーデイネイターを排除しようと躍起になっていた。その状況がデュランダルの演説によって崩されたとはいえ、大西洋連邦は連合及びブルーコスモスの本拠地。運が悪ければ殺されるのがオチだ。

そう考えつつ、シンはもう一度自分の所属を言う事にした。

「ZAFFT軍ミネルバ所属、ミネルバ隊隊員、シン・アスカ」

「ZAFFT・・・？知らない組織だ」

「えっ!？」

ワシントンの想定外の反応に、シンは思わず驚きの声を上げる。ZAFFTと連合は、今まで戦争をしていたのだ。なのにZAFFTを知らないなんて事が有り得るのだろうか。

「とにかく、早くこのモビルスーツを動かしてくれないかな。基地への誘導は私がするよ」

「は、はあ……」

シンにはこの状況が何が何だか分からなかったが、とにかくついて行くしかないと思
い、デステイニーで彼女達について行く事にした。

また同時刻 ミッドウエー島から西方約300 km

この海域を、1隻のイージス艦と1隻の空母が航行していた。だが、周辺の晴々とし
た、平和な景色とは裏腹に、2隻の艦の艦橋は、ハチの巣を突いたような騒ぎとなつて
いた。

「ふう……抜けたようだな。各種計器のチェック急げ」

この状況の中で、イージス艦——DDH—182『みらい』の艦長、梅津三郎一等
海佐は冷静な判断でクルーに指示を出す。

そう、今から2〜3分程前にみらいは謎の嵐に巻き込まれ、僚艦との連絡も取れなく
なり、嵐から抜けた時には天候が嵐に遭う直前の晴天に戻ったのである。

だが、先程から僚艦の安否を確認出来ずにいた。

（何か、とんでもない事に巻き込まれたのだろうか……そうではないと思いた
いが……）

梅津はあの嵐の謎に一抹の不安を覚える。

この不安が現実になる・・・否、もう既に現実となつていても知らずに・・・。

みらい CIC

一方、このクルー達も奮闘していた。その内の一人、青梅もレーダーの画面を睨んでいるが、一向に何の反応も察知しない事に落胆していた。

「駄目だ・・・僚艦の反応が無い」

「いや、まだ諦める訳にはいかん。もつとよく探せ」

みらいの砲雷長である菊池雅行は、青梅に声を掛ける。だが、その内心で彼も焦りを覚えていた。無理もない、先程まで共に航行していた僚艦の反応が全てロストしたのだから。

その時であった。

「・・・ん?」

青梅がレーダー画面に映る新たな反応に気付く。

「西方20 km・・・西方20 kmの島に新たな反応有り!これは・・・救難信号、か・・・?」

「何!?!」

菊池がその言葉に反応する。見ると、ミッドウェー島に救難信号の反応があるのではな

いか。

まさかと思いつつ、菊池は艦橋への回線を開いた。

「本艦9時の方向より救難信号を探知！」

「……どうしますか？」

またまた同時刻 とある島 砂浜

「……う……ん」

あれから、どれくらい経ったんだろう。

目を覚ますと、私は砂浜の上にあった。

「……ここは？」

何処だか分からないけど、なんとなくではあるけど、ここがシャードではないような気がした。

「私……あの宙域にいたヴァイスを皆で全部倒して……そしたら、あのブラックホールに吸い込まれ、て——ッ!?!」

「……あつ。」

「そうだ！シタラさんと文嘉さん、楓さんは!?!」

辺りを見渡してみた。でも、人影らしきものは何処にもない。

「まさか……この島には、私一人だけしかいない——?」

考えたくもない、嫌な予感だった。私は、現実逃避するかののように砂浜に寝転がった。それから数分経った頃だろうか、私は仕方なしに起き上がり、島を一周してみようかと思つたその時だった。

「夜露ちゃん……?」

後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。この声つて……もしかして——

そう思つた私が、後ろに振り返つてみると……

「シタラさん!」

そこに立っていたのは私より一つ年上の先輩、兼志谷シタラさんだった。

「良かった……!私一人だけじゃなかったんだ……!」

「私もさつきまではそうなんじゃないかと思つたんだ」

「全く、あそこに立っている者はつて言つて急に走らないでよ……」

シタラさんの後ろから私とシタラさん以外の声が聞こえた。私とシタラさん……つて事は、

「文嘉さん!」

シタラさんの後ろを覗くと、そこにはシタラさんと同じく私より一つ年上の先輩、百科文嘉さんが立っていた。

「文嘉さんも無事だったんですね！」

「目が覚めたら砂浜の上で倒れていたから驚いたわよ」

「私とふみつちは目が覚めてすぐに会ったんだけどね」

「・・・それにしても、ここは一体何処なんすかね？」

私のこの言葉に、シタラさんと文嘉さんは少し気まずい表情になる。その様子から、まだ分かっていないのだと私は思った。

「それが、どちらやくそよく分からないのさ。さつき目が覚めたばかりだし、ギアは何処にも見当たらないし・・・」

「起きてからすぐそれが分かっていたらこうして話している間に連絡が取れている筈でしょ？」

「そうなんすか・・・」

やっぱり・・・だとしたら、ここは一体・・・。

「・・・でも、通信機は手元に残っているからこれで救難信号を発信してみるわ」

「えっ!?!」

「マジで!?!ら、ラツキー・・・!!」

文嘉さんの言葉に、私とシタラさんは歓喜の声を上げた。良かった。救難信号を発信すれば、後は楓さん達が助けに来るのを待つだけだ。この時、私は・・・いや、私とシ

タラさんと文嘉さん、この場にいた全員がそう思っていた。

救助してくれた人達と初めて会うまでは……。

またまた同時刻 大西洋

ここに、2隻の艦が存在していた。

2隻の艦も言っただけなら、何の変哲もない艦艇と思いがちだろうが、この2隻に似た艦は存在しないだろう。

一方は白を基調としたカラーリングと天使や白馬を彷彿とさせるシルエットの……もう一方は、ピンクを基調とした軍艦に塗る色とはとても思えない奇妙なカラーリングと女神のような美しいシルエットの艦であり、ここまで個性的なこの2隻をこの世界の人間が見たら絶対に驚くだろう。というより驚かない方が可笑しい。

その2隻の艦の白い片割れ……強襲機動特装艦『アークエンジェル』の艦橋で、艦長を務めるマリユー・ラミアスはピンクの艦『エターナル』に搭乗しているピンク髪の少女と通信で話していた。

「……つまり、要約すると……本艦はオーブ領海に入る直前に、そちらは宇宙で開発が完了した新型MSを搭載して出航した直後に超常現象に遭い、気付けば大西洋に飛ばされた、という事ですね」

『はい……私共としてもこの現象は想定外のものでした』

マリューが先程までの会話で双方が遭遇した謎の現象及びアークエンジェルとエターナルが合流するまでの成り行きを纏めると、ピンク髪の少女——ラクス・クラインが領く。

「しかし、あの戦闘でキラ君を失ったのは痛いわね……しかも、ヘブンズベースとジブラルタルが大西洋に面している以上、連合・ザフト両方に襲撃されてもおかしくない、危険な状況……何とかしてもう一度オーブにたどり着きたいところね」

『ですが、それまでに水と食糧が保つか心配です。西へ行けば、大西洋連邦に着きますが、全力で攻撃してくる可能性があり、キラがいない以上、幾ら何でも無理がありますわ。東に行っても今のZ A F Tはデュランダル議長の駒としか言いようがありませんわ』

「どちらに行ってもあまり期待出来ないわね……」

『……それでも、オーブにたどり着くまでの水と食糧の問題がともではありませんが私も心配ですわ。ここは思い切ってジブラルタルに向かう、というのはどうでしょうか？』

マリューは驚いた。今の会話で言った通り、今のZ A F Tはデュランダルの駒である。だが、アークエンジェルはようやくオーブに着いたと思った矢先にこの通りであ

る。残りの水と食糧がどれくらいあり、いつまで保つのか、という事は正に死活問題と言っても過言ではない。スカンジナビア王国に向かおうにも、ここからではどうやってもZ A F Tのジブラルタルからヘブンスベースへのルートを突っ切る必要がある。ゴリ押しで行くにも今の状況下では危険な行為だ。

「・・・分かりました。本艦はこれよりジブラルタルへ向かいます。エターナルは本艦に追従してください」

『ありがとうございます』

『うーむ、確かにとんでもなく危険だが、姫様の考えなら仕方ないか。しかもよりにもよって八方塞がりのこの状況だ。よしお前ら、人生初めての水上航行だ！気を引き締めてかかれよ！』

エターナルの艦長アンドリユー・バルトフェルドがクルーを鼓舞し、通信を切る。マリユーはそれにクスツツと微笑みながら、命令を出し始めた。

「これより、本艦及びエターナルはジブラルタルへと向かう。各員、戦闘に備え——」
「艦長！北北西に正体不明の物体を複数確認！」

アークエンジェルの索敵担当であるチャンドラ2世が異常を知らせる。

「・・・？正体不明の物体ですって？」

「はい。カメラ映像をモニターに出します」

果たして、モニターに映し出されたのは・・・

またまたまたまた同時刻　アメリカ合衆国　ワシントンD.C.　ホワイトハウス

「大統領、緊急事態です！」

「どうしたのかな？」

「本土西部の全ての州との通信が・・・繋がりません!!」

「なっ——」

第5話 誘われし者達・後編

午前11時29分 ハワイから西北西100km

「……長」

「……ください……長」

「起きてください……長」

「起きてください、艦長!!」

「——!」

黒い制服を着た男性に身体を揺さぶられ、白い制服を着た女性は目を覚ます。彼女が目覚めると、そこは艦のブリッジだった。

彼女の名はタリア・グラデイス。Z A F Tの士官であり、この艦……『ミネルバ』の艦長でもある。

「アーサー、無事なのね……?」

「私も皆も無事なのに、艦長だけ無事じゃない訳が無いですよ!」

黒い制服の男性……アーサー・トラインの言う事には、どうやらミネルバのクルーは、少なくとも現時点で確認がついた者達は全員無事との事らしい。

「・・・状況は？」

「現在、確認中です」

「確認中？ミネルバの現在地は？」

「そ、それが・・・GPS及び軍事衛星とのリンクがエラーを起こしており、座標を割り出せません」

タリアはアーサーの返答を聞いて、オペレーション・ラグナロクに参加すべくヘブンズベースへと向かっている最中に遭遇した謎の嵐を思い出す。

(まさか・・・GPSのエラーはあの嵐によるものなの・・・？)

タリアはそう考え、口を開く。

「ミネルバの状態はどうなの？」

「特に損傷はありません。ですが——」

アーサーが続いて何かを言おうとしたその時、ブリッジの自動ドアが開いた。

「失礼します！」

大慌てで入って来たのは、ジブラルタル基地でZGMF-X666S『レジェンド』を受領したミネルバ隊所属のパイロットであるレイ・ザ・バレルと、レイとは同い年の整備員であるヨウラン・ケントだった。

レイが息も絶え絶えに声を出す。

「艦長、大変です!!」

「どうしたの、そんなに慌てて・・・」

タリアは不思議そうな顔で何事かと問う。すると、レイの口から思わぬ答えが出た。

「格納庫の状態を確認したのですが・・・」

シンとデステイニーが・・・何処にも見当たりません!!」

「・・・え?」

タリアとアーサーは、レイの報告に耳を疑った。

2分後 ミネルバ 会議室

タリアを始め、レイを含むパイロット達、整備班長のマッド・エイブスといったミネルバの幹部により、緊急会議が行われていた。

現在、ミネルバ隊が置かれている状況の確認とこれからの行動について、この場の隊の幹部同士で話し合う事にしたのである。

「・・・という訳よ」

タリアが現時点で判明している事を一通り言い終える。

「しかしね・・・正直、私もこんな事態は生れてはじめてよ・・・」

「艦長、それはミネルバにいる者全員が思っている事です」

タリアが愚痴半分で漏らした言葉にレイは冷静な口調で同意の意を表す。レイの言う通り、ジブラルタルでの補給で新たに配属された人員を含むミネルバクルー全員が思うところであった。

「各員からの報告は？」

「まず、整備班からです。格納庫内はシン・アスカ及びデステイニーの姿が消えて無くなっていったという事を除いて、全機共に異常は見られませんでした。私からは以上です」

タリアの問いに最初に答えたのは整備班長を務めるマツドであった。期待の新型機であるデステイニー、そして何より自分が男としての信頼を寄せていたパイロットの一人であるシンが、自分達が気絶している間に姿を消してしまった事に不安を覚えている様子だった。

「それよりも艦長、私としては物資の方も心配ですわ。ジブラルタルを出たばかりで、現在は食糧・弾薬共に余裕はありませんが、何日も海をさまよい続ければ必ず底をついてしまいますわ」

金髪ツインテールに蒼い瞳、おまけに美しい顔立ちといういかにもお嬢様キャラのよいうな赤服のパイロットがタリアに指摘する。ジブラルタルでの補給で新たにミネルバ隊に配属されたパイロットのリーダー的存在であるこの少女の名はリディア・ガブリエ

ルという。富裕層と貧民層の差が比較的大きいと言われるプラントのいいところのお嬢様で、腕もそこそこ高く、宇宙部隊から共に転属されたエースパイロットで、もう2人のパイロットは彼女の補佐役・・・というよりメイドの方が近いだろう。

「二応、ジブラルタルに引き返す案も浮かんではいるのだけれど、そのジブラルタルどころか他のZ A F T部隊との通信も取れないままなのよ。もしかすると、最悪の事態も考慮する必要があるわね・・・」

「・・・あの」

と、ここで赤髪赤服の少女・・・ルナマリア・ホークが手を挙げる。

「もしかしたらと思うんですけど・・・私達、ミネルバごと異世界転移・・・とかしちやつたりして・・・」

「「「「「・・・は?」」」」」

3分後 ミネルバ 格納庫

そこに、レイは目覚めてから再び格納庫を訪れた。

「状態はどうだ?」

「おう、コンディションはバッチリよ!」

レイがコアスプレnderの整備をたつた今終えた整備員に声を掛けると、整備員は元

気で答えた。

レイはコアスプレnderに乗り込むと、計器のチェックを始める。

だが、このコアスプレnder・・・実はシンがデステイニーに乗り換えるまで使つていたものではない。

シンが元々腕が良かった事で、使われないまま半ばお蔵入りという状態になっていた予備機なのである。

その予備機の機首には、偵察撮影用の高解像カメラが取り付けられていた。

実は、先の不可解な状況とルナマリアの発言で、異世界転移説が急浮上し、もしかしたら最有力なのでは!?!という事になり、急遽、コアスプレnderを用いた偵察、場合によつてはそのまま異世界文明とのファーストコンタクトを行う事となつたのである。

また、タリアが異世界文明とファーストコンタクトを取つた時にとレイに手紙が入つたプラスチック製の筒を持たせている為、準備は万端であつた。

『進路クリアー。コアスプレnder、発進どうぞぞ!』

無線からオペレーターであるメイリン・ホークの明るい声が響く。

「了解。レイ・ザ・バレル、コアスプレnder出る!」

レイがそう言うと、コアスプレnderは玉がパチンコで飛んでいくかのようにミネルバのハッチから射出され、そのままジブラルタルがあるであろう東南東へと飛び立つ

た。

言い忘れるところだったが、レイが偵察飛行に行っている間の編成は以下の通りである。

レジェンド ルナマリア・ホーク

インパルス リディア・ガブリエル

グフイグナイテッド クレア・フォレストル

ザクウオーリア リサ・アマネ

ザクウオーリア パイロット無し

レイ出撃から1分前 ミッドウエーから東方500 km

この海域を、1隻の原子力空母が東に進んでいた。

ニミッツ級原子力空母一番艦『ニミッツ』……この世界におけるこの艦は、退役年である2024年を3年後に控えた2021年の太平洋決戦で没した艦の一つである。

その沈んだ筈のニミッツが……今、東に進んでいるのである。

ニミッツのCICで、クルー達が慌ただしく動いていた。

「僚艦の反応、依然として現れません」

「うゝむ……」

ニミッツ艦長マシユー・イーランド大佐は、クルーからの報告を聞きながら考えを巡らせていた。先程、嵐を突つ切つたのだが、どうにもその嵐が奇妙なものだったのである。

嵐を突つ切つた起こつた不可解な出来事は、僚艦との通信が突如として途絶えてしまった事、そして無線にどこからも応答が無い事であった。

「もしかすると・・・」

マシユーの脳裏に、ある予感が浮かんだ。

「直ちにRF—8Gクルセイダーを発艦させ、ハワイに向かわせたまえ。そしてハワイを撮影させるんだ」

「はっ！」

マシユーの命令を受け、1機のRG—8Gがエレベーターで格納庫から甲板に甲板に揚げられ、そこからカタパルトに移動した。前方のランディングホイールがカタパルトに固定され、その直後にRF—8Eのノズルからアフターバーナーが出る。直後、RF—8Eはカタパルトによって勢い良く投げ出され、そのままハワイに向かつて飛んで行った。

同時刻　ハワイから南方約30 km

「全く、ここ何処なのよぉぉ!!」

海の上に広がる大空を飛ぶ蒼いモビルスーツのような人型機動兵器のコックピットで、少女は困惑した表情で叫ぶ。

彼女の名はステイレット。フレームアームズ・ガールという、本来ならば人間の10分の1程度のサイズのロボットであるのだが、ステイレットが目覚めた時には人間と同じ大きさになっていたのである。

現時点で本人に自覚があるのかはまだ分からないが。

「轟雷もバーゼもシロもクロも迅雷もアーキテクトも、あのアホっ子も何処に行ったのよぉぉ!!」

何度叫んでも返事が返ってこない無線に、ステイレットは苛立ちを覚えていた。

その時だった。

「・・・あれ?」

ステイレットは、前方のモニターに島のような何かが遠くにポツンと映っているのに気付いた。

「しよがないわね、あの島に行つて、皆が何処に行ったのか聞いてみるしかないわ!」
ステイレットはそう言つて、自分が乗っている機体を前に進ませた。

また同時刻 アズールレーン・ハワイ基地 港

レッドアクシズの動向を監視する為に建設されたこの基地に、1人の男性が降り立った。

カーキ色の軍服を身に纏ったその金髪碧眼の、10代後半のイケメン士官の名はアレックス・グレイ。ユニオン出身で、軍人家系生まれという少し硬めな者である。階級は少佐であり、この基地の指揮官に任命されたのだ。

「お待ちしておりましたわ。貴方が指揮官様ですわね？」

「・・・ああ。貴女は？」

「私は装甲空母——イラストリアスですわ。ごきげんよう」

到着早々、アレックスを待ち構えていたのはキャペリンハットを被り、豊かな身体に少々透けた白いドレスを身に纏う白髪のロイヤルのKAN—SEN、イラストリアス級航空母艦一番艦『イラストリアス』だった。

「君が指揮官か？」

アレックスがイラストリアスの巨乳を見て少し顔を赤らめていると、横から誰かに声を掛けられた。

アレックスが声のした方向を向くと、そこには金髪赤眼の女性が立っていた。

彼女はキング・ジョージV世級戦艦二番艦『プリンス・オブ・ウェールズ』。イラスト

リアスと同じく、ロイヤルのKAN—SENである。

「キング・ジョージV世級二番艦、プリンス・オブ・ウエールズ。指揮官、よろしく頼む」
「アレックス・グレイ少佐だ。こちらこそよろしく頼む」

気を取り直したアレックスは、ウエールズと握手を交わす。
その直後だった。

「・・・？」

ウエールズが何かに気付く。

「あれは何だ？」

「あれ？本当だ、確かにあの方向から何かが・・・」

「あれは何でしょうか・・・？」

ウエールズにつられて、アレックスとイラストリアスも南の方角を見る。見ると、その方角から何かが近づいて来るのが分かった。

それはどんどん近付いていき、やがて特徴が大体分かるようになった。

青を基調としたカラーリング、頭部の額の部分に付いている1本のブレードアンテナ、そして右手に持っている時代遅れのガトリング砲のような形状の機関銃、そして何より、人間を10倍近くにまで巨大化させたような図体。

アレックス達の全く知らないものだった。

幸いと言って良いのか、おかしな事にいきなり攻撃はせず、ある程度こちらに近付いてきたところで空中静止し、ホバリングを始めたのである。

「何あれ……」

「何だろう……?」

「え〜何あれ〜」

明らかに緊張感が全く感じられない者が混じっているが、その人型ロボットを発見したKAN—SEN達が1人、また1人と集まってくる。

「何だこの騒ぎ……って、ええ!」

司令部から何事かとやって来た金髪ロングヘア&サイドテールに赤眼という勝気な風貌のKAN—SEN、クリーブランド級軽巡洋艦一番艦『クリーブランド』が人型ロボットを見て驚愕する。それと同時に、人型ロボットはゆっくりと降下し始めた。

クリーブランドはアレックス達の元に駆け寄った。

「ウェールズ!あれは一体……って、君は?」

「君……ああ、俺はアレックス・グレイ。今日付けでここに着任した。よろしく」

「あ、ああ。よろしく……って、そんな事言っている場合じゃないだろ!?!なんだよあれ!?!」

「悪いが俺達も知らない。だが、敵か味方かも分からない以上、下手に手出しはしない方

が良いと思うが?」

「そんな事言ったって!」

アレックスとクリーブランドが言い争いをしている間に、人型ロボットは遂に地に足を付け、直後に腹部のハッチが開いた。コックピットらしきものから出てきたのは水色ツインテールの少女だった。

「アンタ達、ちよつといいかしら?」

「・・・?」

「こ、今度は何だ!?!」

コックピットを出てからの自分の第一声に戸惑いを隠せないアレックス達を見下ろしながら、少女・・・ステイレットは質問した。

「轟雷っていう子を知らないかしら?」

第6話 盾とアクトレスと桜と

午前11時37分 みらい ミーティングルーム

「・・・という訳です」

「なるほどな・・・」

文嘉さんが、みらいという護衛艦の艦長さんと副長さん、テレビ電話での参加ではあるけどひりゆうという空母の艦長さんに目が覚めてからの事の一通りの説明を終えた。

「しかし、驚いたな・・・。未来からタイムスリップしてきたとは・・・」

「ええ、こちらでもまさかこのような事に遭うとは思ってもみませんでしたので・・・」

みらいの艦長・・・梅津さんの反応に、文嘉さんは同意する。それもそうだ。まさかタイムスリップしてしまうなんて、夢にも思わなかったから。

みらい CIC

「・・・ん？なんだこれは？」

青梅が何かに気付いた。

「ミッドウェー方面よりアンノウンを多数捕捉！数20、高度10000m、速力150

「ノット!」

「何ッ!?!」

青梅の言葉とリーダー画面に映る複数のUNKNOUNという文字が付いた白い点
に、菊池は目を見開く。

みらい ブリーフィングルーム

「こちらにアンノウンが多数接近しているだ?!?分かった、すぐに艦橋に戻る!」

梅津はそう言って、艦内電話の受話器を戻す。

「何かあったんですか!?!」

夜露は何事かと梅津に尋ねる。

「ああ、アンノウンが多数接近しているらしい!」

「アンノウン!?!」

「マジで!?!」

梅津からの返答に、夜露とシタラは驚愕する。

「詳細は分からないのですか?」

「うむ、私もまだ報告を受けたばかりだ。私と角松二佐は今から艦橋に戻るから、君達は
ここで待っていてくれ」

「・・・分かりました」

アンノウンの正体が気になるところではあったが、夜露達は梅津の言葉を洩々受け入れた。角松は梅津に続くようにブリーフィンググループを後にした。

ひりゆう 艦橋

「状況はどうなっている?」

『はッ! UNKNOUNは依然として接近中!』

小鳥遊はCICからの報告を耳にし、思考を巡らせる。

(UNKNOUNは恐らくアメリカ軍のものではないな。新型を出すとすれば、事前に何らかの情報が出る筈だ・・・もしや、彼女達の話に出て来たヴァイスとやらか?)

小鳥遊はアンノウンが夜露達の話に出て来たヴァイスという存在であるという可能性に気付く。もしそれが当たっているとすれば、ひりゆうとみらいだけで対抗出来るのか・・・それが心配だった。

「ソリッド隊をスクランブル発進させろ。だが、無理に接近させ——」

『CICより艦橋、新たなUNKNOUNの反応有り!』

「・・・何?」

みらい C I C

「UNKNOUN、更に接近！」

青梅が現在のアンノウンの動きを報告する。アンノンは依然として接近していた。

「まさか・・・攻撃するつもりか？」

菊池がアンノウンの動きを危惧していた。

「・・・ん？待ってください、これは!？」

青梅が更なる状況の変化に気付いた。

「UNKNOUNの後方に：更にUNKNOUNの反応有り！数28、速力170ノツト、あと20秒程で手前のUNKNOUNに追いつきます！」

「何!？」

突然の事態に菊池は目を見開いた。

「カメラ撮影しました！画像、メインモニターに出します！」

いつの間にか撮影した画像がメインモニターに映し出される。それは、手前のアンノウンを写したものだだった。

「何だ、これは・・・？」

菊池は思わずそう呟いた。

黒を基調としたカラーリングに不気味なシルエット。菊池のみならず、みらいやひ

りゆうの全クルーの知らない……否、あるゲームを知る者だけが知っているものだった。

みらい デツキ

「見えた……あれは!？」

艦橋に戻った梅津と角松の2人と入れ替わるようにデツキに出た尾栗康平三等海佐は撮影されたアンノウンを視認した。

「あれは……まさか!？」

柳もそれを視認したが、彼はそれを知っているようだった。

「知ってんのか、柳!!」

「はい!あれは、艦隊これくしょん……通称『艦これ』に出てくる深海棲艦の艦載機の種類です!」

「はあっ!？」

柳の言葉に尾栗はいまいち理解していなかった。それもその筈、尾栗は艦これなどやった事が無いのである。

と、その時、別の扉から誰かが出て来た。それも3人が、である。

出て来たのは夜露達だった。

「ん!? おいお前ら、何やってんだ!? 早く部屋に戻れ!」

「すみません! 何が来るのが気になって・・・」

「それで、アンノウンってのは!」

「ああ、あれだ・・・って、んん!」

尾栗はアンノウン・・・深海棲艦の艦載機の新たな動きに気付く。何者かから追撃を受けているようだった。

「あれは・・・零戦ですよ!」

「零戦・・・って、日本のレシプロ戦闘機!? って事はもしかして・・・艦これの世界!」

「シタラさん、艦これって何すか?」

「ふっふーん、よくぞ聞いてくれました! 艦これとは——」

「お前ら（貴女達）そんな事言ってる場合じゃないだろ（でしょ）——!!!」

柳の解説を差し置いて、尾栗と文嘉が夜露とシタラの会話にツツコミを入れている間に、深海棲艦の艦載機達は零戦の群れに次々と撃墜されていく。

「・・・ん?」

だが、シタラは零戦の異変に気付いた。

「あの零戦・・・赤く光っているのと青く光っているのが殆どじゃ・・・」

「「「・・・え?」」」

シタラの気付きに一同嘩然とする。

ひりゆう 艦橋

「・・・何やってんだ、アイツら？」

ひりゆうクルーの1人がみらいのデッキでコントジみたやり取りを双眼鏡で見ている。
た。

そんな事などお構いなしにドッグファイトを繰り広げている零戦と深海棲艦の艦載機の群れを見ながら、小鳥遊は以前として思考を巡らしていた。

(これは・・・スクランブル発進させる手間は省けたと考えるべきか？だが、光る零戦はともかくとして、あの不気味な飛行物体・・・もしや、深海棲艦の艦載機か？息子が艦これというのをやっていたのを見た事があるが・・・)

小鳥遊も、艦これを知っていた。

みらい CIC

「・・・はッ!? 2時方向より、更にUNKNOWNの反応! これは・・・大型艦か? しかも4隻・・・」

「またか・・・!?!」

更なる状況の変化に、流石の菊池も汗をかき始めていた。

「4隻共にこちらに向かっています！」

「一体、何がどうなっているんだ？」

菊池はそう返す他無かった。

ひりゆう 艦橋

「・・・そうか。恐らく、あの深海棲艦の艦載機について知っているを見て良いな。一応、コンタクトを取ってみようと思う。だが、有事に備えよ。以上だ」

小鳥遊はCICからの報告を聞くと、そう返した。大型艦のUNKNOUN4隻が先程のドッグファイトで全て撃墜された深海棲艦の艦載機について大方知っている。だとすれば、ここは思い切ってコンタクトを取ってみるのが得策かもしれない。というのが、小鳥遊の考えだったのである。

「こちらから、通信は出来るか？」

「あちら側がこちらと同じような通信機器があるのかは分かりませんが・・・やってみます」

「みらいにも今からコンタクトを取る事を伝えろ」

「はッ！」

ひりゆうとみらい、そして4隻の大型艦からなるUNKNOUN。
双方のコンタクトが今始まった。

1分後　みらい　デツキ

小鳥遊からの命令を受け取った梅津の指示により、みらいもUNKNOUNとのコンタクトに備えていた。

「・・・見えた!」

尾栗が双眼鏡でそれらを視認した。

「あれは・・・一航戦と五航戦!?!でも、艦これではありません!」

アズールレーンの方のです!!」

「・・・はあああつ!?!」

尾栗は、また知らない単語を聞いて困惑した。

ひりゆう　艦橋

「・・・艦これの一航戦と五航戦は、あのような姿だったか?」

「いえ、あの姿ではなかった筈ですが・・・」

小鳥遊と副長も、一航戦と五航戦・・・正確には、船体の甲板の上に立っている少女

達の姿を見て困惑していた。

一航戦の方は妖狐のような、五航戦は鶴を模した着物を纏っているかのような姿だったのである。

「UNKNOUNより発光信号！『我、重桜艦隊！』我、重桜艦隊！貴艦隊トノ接触ヲ希望スル！」

「あちら側も、転移してきたという事か。発光信号で伝える。こちらは海上自衛隊海外派遣艦隊旗艦ひりゅう、貴艦隊との会談を望む」

「はッ！」

こうして、ひりゅうとみらいは重桜の一航戦、そして五航戦との邂逅を果たし、共に日本に針路をとる事となったのである。

第7話 出向初日の緊急警報（エマーゼンシー）

ここで、この世界における2019年からキアナと芽衣の転移までの間の歴史を説明しよう。

2019年9月6日、中国・武漢市にて1発の核兵器が爆発した。これにより、武漢市は死者900万人以上（市外から来た者を含む）という壊滅的な被害を受けた。後にこの悲劇は『武漢核爆発事件』と呼ばれる事となった。

同年12月19日、大型宇宙ステーション『ユグドラシル』の建造が開始する。

2020年2月26日、エジプト首都であったカイロを首都とする、エジプト・スーダン・リビア・チュニジア・アルジェリア・モロッコ・西サハラからなる連邦制国家『北アフリカ連邦』が建国される。

同年7月24日、東京オリリンピックが開催される。

同年11月2日、ユグドラシルの建造が完了する。

そして2021年・・・深海より、世界に戦火の火種が降り注がれた。

5月1日、第50回衆議院総選挙にて鹿島久雄が当選、総理大臣に就任する。

7月1日、太平洋にて、豪華客船『アルペジオ』が何者かの攻撃により沈没。この事

件が国連軍艦隊の設立のきっかけとなった。

7月29日、国連軍艦隊と深海棲艦の・・・否、人類と深海棲艦の、最大の戦いが繰り広げられた。国連軍艦隊は善戦こそしたが、深海棲艦に対する有効打を与える事が出来ず、原子力空母を含む航空母艦10隻、ミサイル巡洋艦18隻、ミサイル駆逐艦19隻を失う多大な被害を被った。

10月3日、中国南東部沿岸付近一帯が深海棲艦の攻撃を受け、死者500万人以上、負傷者9000万人以上という甚大な被害が出た。

10月7日、満州連邦共和国が独立を宣言する。

2022年3月1日、世界初の量産型モビルスーツ『GAT-01』^{ストライクダガー}の配備・運用が開始される。

同年3月3日、初のヨーロッパ製モビルスーツ『ZGMF-1017』^ズがロールアウトされる。

同年4月27日、日本国自衛隊のストライクダガーの配備・運用が開始される。

2023年8月10日、横須賀近海に侵攻した深海棲艦を1人の少女が撃破。世界で初めて艦娘の存在が確認され、人類の反撃の狼煙となった。

2024年 7月6日 午前8時12分 東京都 キアナと芽衣の自宅

7時50分に起きたキアナはほぼ同時に起きた芽衣と共に朝食を作っていた。

その途中、2人は一昨日保護した少女と青年に関する話をしていった。

「じゃあ、イーグルちゃんと総一郎君に関する事はまだ何も分かってないの?」

「うん。鹿島さんと坂本さんも、この事について調べてくれていているけど、今のところ手がかりといえるものはあの2機だけだって」

『イーグル』は少女の、『総一郎』は青年の名前である。

イーグルという名前の由来は、フレズヴェルクが鷲の巨人を指す言葉で、『鷲の巨人』から鷲を取った事である。

なお、総一郎という名前は、芽衣が自分のセンスで付けたのであり、キアナも良いんじゃないかと太鼓判を押した事で芽衣考案のこの名前が決定されたのだ。

単に総一郎という名前だけでは些か寂しいし苗字が無いのはあれなので、勝手ながらキアナが姫子の苗字である無量塔を彼の苗字にした為、戸籍上(?)では青年は『無量塔総一郎』となっている。

それはともかく。

2人が朝食の準備を進めながら、2人は話題を別のものに変えた。

「そういえば、鹿島さんが言っていたアズールレーンとの交渉、上手くいっていると良いけど……」

「うん……外交官をアメリカやイギリス、フランスやドイツとかとの多国籍使節団に参加させているそうだから、何とかなると思うけどね」

芽衣に返事をして、キアナがテレビに視線を移すと、丁度その話題に関するニュースについての議論が行われているところだった。

『転移した国家がもし本当に1940年代前半のアメリカやイギリスと同じ性質の国だったとすれば、どうなるのでしょうか？』

『はい。当時は人種差別の全盛期とも呼べる時代でしたので、間違いなく我々日本人やその他のアジアの人々はその弊害に晒されるでしょう。また、パールハーバーで正体不明の武装組織が奇襲攻撃を行った事について、国連側は深海棲艦によるものと見ていますが、転移した国家側が騙し討ちとして見ている以上は、和平交渉はかなり難しいのが現状と思われまます』

このニュースの内容はこうだ。

国連側の使節団と転移した国々との交渉について分かった情報によると、転移した国々側……アズールレーンという軍事同盟の構成国であるらしい彼らの言い分によれば、『重桜』という国が自分達に対して騙し討ちをしたらしい。更に、アズールレーン側は日本を重桜として見た上で国連をアズールレーンの敵対同盟であると思っっているらしいのである。

「2人共、おはよう」

「めいゝ、きあなゝ、おはよゝ」

と、そこに起きた総一郎とイーグルがやって来た。

イーグルは元気な女の子の生き生きとした、総一郎は上半身真つ裸になつたら絶対モテそうなボディで、2人揃つてかなりナイスな肉付きだった。

「あつ、おはよう」

「おはようイーグルちゃん、総一郎君」

キアナ達は席につき、食事をした。

そして、食べ終わつてから十数分後、キアナ達は家から出発した。

午前9時48分 神奈川県 横須賀鎮守府 たけみなかた 格納庫

現在、この鎮守府に停泊しているたけみかづち型MS護衛艦二番艦『たけみなかた』の格納庫、その中のあるハンガーに固定されているモビルスーツ：MTF-01『戦雷』の傍で1人の青年と整備班長が会話をしていた。

男性アイドルとしても人気が出そうな顔立ちの青年の名は橘基矢。航空自衛隊MS技術試験小隊の隊長を務めている。階級は二等空尉で、知る人ぞ知る隠れイケメンである。

そして中年の整備班長の名は北見淳。その気になれば文字通りやベーレベルのセツティングやチューニングもやってのける事から『地獄のチューナー』の異名で恐れられている超一流の整備士である。

「そういえば、聞きましたか？」

「ん？なんですかい？」

「いや、ここに機体とパイロットが来るって話なんですけど、北見さんは新しくやって来る機体について何か知ってますか？」

「んー……」

橘の質問に北見は少し小さめなうねり声を上げる。そして、腕を組んで口を開いた。

「何でも、2機とも試作機と呼びパーツは後から送られてくるってのは聞いたんですけど、それ以外はまだ知らされてませんよ」

「そうなんですか。ありがとうございます……ん？」

北見に礼をした直後、たけみなかたのハッチが開いた。そこから4人の人影と2機のモビルスーツが入ってくるのが確認出来た。

「おつ、噂をすれば何とやらじゃないですか」

「例のモビルスーツと成子坂からの出向者か」

入って来た4人を出迎える為、橘は戦雷から離れる。4人を代表して白髪の少女が前

に出て手を差し出す。

「成子坂重工から来ました、雷電紀亜奈です。よろしくお願いします」

「航空自衛隊MS技術試験小隊長、橘基矢二等空尉だ。こちらこそよろしく頼む」

「はい。橘二尉」

そう言つて握手を交わし、双方のファーストコンタクトは無事に終わった。

キアナは他国で言う空軍である航空自衛隊の部隊が何故海上自衛隊の指揮下にあるであろうMS母艦に所属しているのかが不思議でしよがなかつた。詳しく調べてみれば長くなるのだろうが、こんな事ならMS母艦に乗るMS部隊の名称を海兵隊にでも変えた方がいいんじゃないかと思つていた。流星に声に出しては失礼なので口には出さないが……。

「本日より、君達は横須賀鎮守府の指揮下に入ってもらおう。早速で悪いが、一緒に送られてきた各モビルスーツの整備を整備班と共に行ってもらいたい。整備完了後は、指示あるまで待機、以上だ」

キアナが思つている事を知つてか知らずか、橘はキアナ達にそう告げた。

「了解しました」

キアナはそれを承諾して、運び込まれた2機のモビルスーツを見る。一昨日の深海棲艦の空襲の際に搭乗したZGMF-X10A『フリーダム』とNSG-X1『フレズヴェ

ルク』がオリブドラブのシートを掛けられた状態で運び込まれているところだった。

「……ん？」

と、ここでキアナはある事に気付いた。

フレズヴェルクに掛けられたシート……正確には、フレズヴェルクの右脚にかかっている部分の先端付近が不自然な動きを見せたのだ。

（誰かいる……？）

キアナは直感にも近い感覚でそう確信したが、整備員が調べてくれるのなら大丈夫かとひとまず思考の片隅に置いた。

「ほー、あの2機が例のモビルスーツか。早く全貌を見てみたいもんだ」

橋の後ろでフリーダムとフレズヴェルクを見ていた北見が感嘆の声を上げる。するとキアナ達の方を見て爽やかな笑みを浮かべて挨拶を始めた。

「じゃあ俺からも。たけみなかたの整備班長、北見淳だ。お嬢さん方、よろしくな」

キアナから見る北見は、一見明るそうに見えるが、裏腹に見えないものを容易く見破れる程の洞察力を隠し持っているようにも見えた。中年層の知り合いがあまりいないキアナ達にとって、北見はそれ相応に特異な人間なのである。

「雷電芽衣です。よろしくお願ひします」

「僕はイーグル・バルザックですッ！よろしくお願ひしまーす！」

「無量塔総一郎です。よろしくお願ひします」

「芽衣ちゃんにイーグルちゃん、総一郎か。今後ともよろしく頼むぜ」

これでこの場の自己紹介は粗方終わった。それを確認した橘はキアナと芽衣に指示を出す。

「紀亜奈さん、芽衣さん。一応言っておくが、俺が乗る戦雷の調整はスラスターを除いて粗方済ませている。スラスターの調整が終われば後は本番だな。君達はあの2機の調整をやつて——」

「あつーお、お前らー！こんなところで何してる!？」

橘が言い終わる直前、フレズヴェルクに掛けられたシートをどかそうとしていた整備員が声を上げる。一同がその方向を見ると、そこには茶髪ポニーテールの少女と緑の短いつインテールの少女が整備員のすぐ側で伏せていた。

そう、あの不自然な動きの原因はその少女だったのである。

「あつ、いやゝ・・・私達ゝ・・・」

「職業体験で来たなりゝ」

「職業体験に来る人間がモビルスーツと一緒にシートの下に隠れるなんて事するかつて！」

「ちよつと！その機体で何してるの!？」

少女2人と整備員が言い争っているところにキアナが割って入る。芽衣達もキアナを追いかけて来た。

「あ、ああく．．．ご、ごめんなさい。私、この機体が少し気になっちゃって．．．あれ？」

「ん？ あお、どうしたなり？」

「気になっちゃって．．．何なの？」

「フレズ!？」

「!？」

「!．．．?」

茶髪の少女が放った突然のこの言葉にキアナと芽衣は半ば反射的に身構える。3人以外の者はいまいち理解していない様子．．．

「えっ!？ フレズって、もしかあの!？」

訂正、4人以外だった。

（ま——まさかこの娘、フレズヴェルクについて何か知っている．．．というか何でイーグルの名前候補だった『フレズ』を知ってるの!？）

キアナはそう予想したが、少女はキアナの予想を知っているのかいないのか、イーグルに駆け寄ってそのまま抱きしめた。

「あのねフレズ、轟雷が一昨日から急にいなくなっちゃったの！フレズは轟雷が何処に行っただのか知らない!？」

「うわー！いきなり僕に何するんだー!!」

「えっ・・・?」

イーグルの返事に少女は首を傾げた。まるでイーグルとは知り合いの関係であるかのように。

「な、何言ってるの?この前のバトルで轟雷と引き分けになったでしょ?」

「僕はそんなの知らないよ!」

「えっ!?!」

キアナはイーグルと少女のやり取りを聞いてある結論に至った。

（もしかして・・・この娘、イーグルの知り合い?それに轟雷って・・・その轟雷も、この世界の何処かに飛ばされたって事なの?フレズヴェルクってオーパーツみたいな機体だったし・・・）

そう、実はフレズヴェルクは規格そのものが従来のモビルスーツと全くと言って良い程合わない機体なのだ。

フェイズシフト装甲を持つフリーダムはともかく、フレズヴェルクの一部のパーツは謎の結晶で出来ており、もしかしたらエネルギーを生み出す性質を持っているかもしれない

ないという徹夜で頑張ってくれた技術開発部の先輩達からの研究結果が出ている。

それを聞かされ、茶髪の少女の放った『轟雷』という言葉聞いたキアナは一抹の不安に駆られていた。

「あの・・・名前は何ていうんですか？」

不意に茶髪の少女がキアナに名前は何かと尋ねた。

「・・・雷電紀亜奈。成子坂重工のテストパイロット」

「私、源内あおといいます」

「私は寿武希子というなり」

2人の少女・・・源内あおと寿武希子は自己紹介した。

すると、あおは何やら決意を抱いたような表情で口を開いた。

「雷電さん、お願いがあります。」

私をパイロットにしてk」

ビイイイイン!!ビイイイイン!!ビイイイイン!!

あおが自分をパイロットにしてくれと言い終える直前に突如として格納庫内にサイレンが響き渡った。

『南南東より深海棲艦の航空隊が接近中!!第3MS中隊はスクランブル発進、MS技術試験小隊は敵の奇襲攻撃に備え待機せよ!』

「だそうだ！君達も機体に乗って、命令あるまで待機！いいいな！」

「はい！それとおおちゃん、話は後で聞くから貴女は……北見さんの指示に従って避難して！」

「あつ……は、はい！」

「わ、分かりました！」

避難するようにとキアナからそう言われ、あおと武希子は困惑しつつも了承する。

「はあ……とにかくその嬢ちゃん、お前さんは医務室で居候させてもらえ。おい、この嬢ちゃんを医務室に連れてつてくれ。見学に来た子供が道に迷ったと言つてりや大丈夫な筈だ」

「は、はい！」

北見は最初にあおを発見した整備員に指示を出すと、すぐに持ち場に戻った。といっても、格納庫自体が彼の持ち場なのだが……そこは気にしないお約束である。

1分後 たけみなかた 艦橋

矢継ぎ早に第3MS中隊の機体が全て発進する以前より、飛行甲板の管制塔を兼ねるこの艦橋の人間も、格納庫や基地の者に負けない程に動いていた。

「赤城・加賀・翔鶴・瑞鶴より艦戦隊発艦！」

「昨日配備された烈風一型か。あれの配備がもう少し早ければあれ程の被害を受ける事は無かつただろうな」

オペレーターの報告にそう答えたのはたけみなかた艦長である海原雄山一等海佐。海原は赤城達から発艦した烈風を細目で睨む。

「しかし、つい先程搬入されたあの2機は出さなくて良かったのですか？先日の戦闘から見て強力な戦力だと思えますが・・・」

メガネをかけた男が海原にそう質問する。

「あれはまだ得体の知れん代物だ。それに、そんな状況であれを出すなど言語道断、出せば深海棲艦の奴らが日本の新型兵器と早とちりするのは間違い無い。最悪の場合、塩を送る事になるぞ」

海原の反論にどこか納得が行かないとでも言いたげな表情を浮かべるメガネ男は黒木隆之三等海佐。たけみなかたの副長である。

「ともかくだ。敵艦載機が存在する以上、深海棲艦がどこかにいるのは確かだ。もしもこの時は艦娘達に任せる他は無い」

「・・・はッ」

同時刻 横須賀近海

今、航空自衛隊第3MS中隊『ホワイトキメラ隊』と深海棲艦の航空隊のドッグファイトが始まった。

「各機、散開！ハエ叩きを始めるわよ！」

『「了解！」』

ホワイトキメラ隊長、新沢天城三等空佐の指示を合図に、ホワイトキメラ隊は散開し、赤城達の航空隊と共に深海棲艦の艦載機達を各個撃破していく。

その時だった。自衛隊とも国連軍とも深海棲艦とも違う謎の艦隊が現れたのは……
「新たな敵影？……これは？」

それらは、天城にとつては見覚えのあるものだった。

天城は報告する為、たけみなかたへの通信を開く。

「こちらホワイトキメラ1、新たにアンノウンを捕捉——くっ！！」

報告しようとしていた時に複数のアンノウン……否、3隻のセイレーン量産型が天城の駆る雪のように白い戦雷……戦雷・特壱型にレーザーやミサイルを放った。

天城は特壱型をその場から飛び退かせてお返しにビームライフルで攻撃してきたセイレーン量産型のうちの1隻……巡洋艦クラスのそれにビームを3発お見舞いする。

『隊長！アンノウンの空母から見た事の無い艦載機が発艦してます！』

「……仕方ない、ホワイトキメラより各機、後退して態勢を立て直す！」

「~~~~~り、了解!!」~~~~~」

セイレーンの艦載機が次々と発艦していくのを確認した天城は後退の指示を出す。戦況は止まる事を知らず、変わり続ける。

同時刻 たけみなかた 艦橋

天城からの報告に、艦橋内部は蜂の巣を突いたような状況となっていた。

「艦長！アンノウンですが、どれもデータがありません！完全な未確認です!!」

「・・・一体、どうなっている?」

海原もこの事態に苦虫を噛み潰したような表情を浮かべる。黒木も表情を曇らせている。

「艦長、格納庫より内線電話が・・・」

「何?・・・分かった」

オペレーターへの報告を疑問に思いながら海原は受話器を取る。

「艦長の海原だ。こんな時に何事だ」

「艦長さん！私も出してください!!」

「な、何!?!」

同時刻 たけみなかた 格納庫

キアナの言葉に芽衣とイーグル、総一郎は思わずキアナの方を見た。

『お前はここに來てまだ間もないんだ！それに、そもそもお前は民間のテストパイロットだ！許可など出せる訳が無いだろう!!』

「アンノウンつてのもこつちに向かっているんですよね!? だったら鎮守府を攻撃される前に叩けば被害を出さずに済みます！相手も私達の存在をまだ把握しきれていない筈ですから、意表を突く事は出来るかと！」

フリーダムとフレズヴェルクは既にいつでも動かせるようになっていた。後は鎮守府が敵の射程に入るまでにアンノウンを叩く事が出来るか否か。今鎮守府を潰される事は人類側の太平洋における行動力の低下を意味する。特に横須賀鎮守府は日本最大規模の鎮守府だ。ここを潰されてしまえば、日本は深海棲艦に滅ぼされてしまうだろう。例えそうならずとも、東京は確実に集中攻撃の標的にされるのは火を見るよりも明らかだった。

『・・・』

『艦長、私も彼女に賭けます。アンノウンの詳細が分からない以上、打てる手は打つべきでしょう』

『黒木三佐・・・分かった。だが、もう1機は甲板で待機だ！アンノウンの接近に備える

必要もある！』

「ありがとうございます!!」

キアナは礼を言うのと、電話を切ってフリーダムに乗り込む。続いて芽衣もフレズヴェエルクに乗り込む。

「フリーダムとフレズヴェエルクが出るぞ！ビームライフルとシールド持たせるよ!!」

フリーダムとフレズヴェエルクを発進させるといふ情報を艦長から聞いた北見の指示を聞いた整備員は忙しく、そして活気良く動き続ける。

フリーダムにビームライフルとシールドが、フレズヴェエルクにセットで搬入されたベリルスマツシヤーが装備された。

『フレズヴェエルク、カタパルトに移動してください』

オペレーターの指示に従い、フレズヴェエルクがカタパルトに移動する。フレズヴェエルクがカタパルトに移動すると、フレズヴェエルクの両足がカタパルトに固定される。発進準備完了だ。

『進路クリアー。フレズヴェエルク、発進OK!』

「フレズヴェエルク、発進します!」

芽衣の掛け声と共に、フレズヴェエルクは急加速し、青空の広がる外界に放たれた。

『続いてフリーダム、カタパルトに移動してください』

「了解！」

キアナはフリーダムをカタパルトに移動させる。

『進路クリアー。フリーダム、発進OK！』

「雷電紀亜奈・・・フリーダム、行きます！」

遂に、キアナの駆るフリーダムが発進した。

1分後 横須賀近海

「敵機捕捉・・・あの艦隊と戦闘機達がアンノウン！」

アンノウンを確認したキアナは一番最初にアンノウンと交戦を始めた第3MS中隊の隊長機・・・天城の駆る戦雷・特壱型に通信を入れる。

「こちらフリーダム、援護します！」

『了解・・・それにしても、よく海原艦長が許可を出したわね』

「何とか説得したんです！」

天城は少し驚いたような表情となったが、すぐにその前の表情に戻す。

『・・・なら、私に付いて来なさい。艦載機を射出している敵空母を仕留める』

「了解!!」

天城の指示を聞いたキアナは了承し、空母タイプのセイレーン量産型をマークしつつ

フリーダムを特壱型に追従させる。

『私が呐喊する。フリーダムは後方から砲撃を』

「砲撃・・・了解!!」

天命時代では砲撃などは全くと言っていい程やった事が無かったキアナにとって、初めて実戦で、しかもモビルスーツでやる砲撃はどうしても緊張するものだ。

（出来るか・・・いや、やるしかない!）

それに加え、フリーダムのOSは総一郎が操縦する事しか想定していないのか、並みのパイロットでは扱いづらい代物となっている。フリーダムに組み込まれているマルチロックスシステムという機能など使おうにも機体の制御が出来なくなるので絶対に出来ない。

「・・・だとすれば火力と射程からしてバラエーナよね」

後方から砲撃するとすれば、ビームライフルなんかでは火力も射程も少々不足気味。一応、フリーダムには腰にビームライフルより射程の長いレールガンが左右1挺ずつ配置されているが、生憎両方とも壊れて使い物にならない。

ならば、ここはフリーダムの武装の中で最も火力の大きいバラエーナを使うのが最善と考えたのである。

「落ち着け・・・相手は大型艦、当てられる・・・」

キアナはマークしていたセイレーン量産型をロックオンする。それでもブレる照準を何とか小さくしていく。

「・・・当たれーっ!!」

キアナがトリガーを引くと、バラエーナから大きな熱量を持つ赤いビームが放たれ、吸い込まれるようにセイレーン量産型に直撃した。

直後、空母クラスのセイレーン量産型は音を立てて爆発し、前後真つ二つに割れて轟沈した。

「当たった・・・や、やったんだ・・・」

『各モビルスーツは至急後退してください！大和が砲撃します!!』

「えっ!?!」

『大和が砲撃・・・ホワイトキメラより各機、後ろに下がりなさい！フリーダムも!!』
「り、了解!」

オペレーターと天城の剣幕から、大和の砲撃が凄まじいものだど悟ったキアナはフリーダムをその場から退かせる。

直後、残りのセイレーン量産型は大和の砲撃によって海中に没した。